覚者と世界

朱莉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

終わりのない世界から優しい世界へ放り込まれた少女の物語。

▽

ＰＳ３ソフト、ドラゴンズドグマの主人公がネギまの世界に漂流する物語です。主人公はキャラクターメイキングにより性格にオリジナル要素が多々含まれます。

▽

オンライン要素が多少含まれるかもしれません。ストーリーというよりは職業に関する方ですが。

目次

始まり 1
見知らぬ女 4
誤解と誘惑 10
彼女の名前 15
はかりごと 22
コンヴェンション 25
話頭の中心 30
彼女との遊び 36
仮契約 46
邂逅 52
きっかけ 58
初めてのクラス 69
嵐のあとに 74
やりたいこと 77
労苦 82
叶う? 85
不安 94
ハカナイユメ 101
達成 108
こども先生 114
大混乱 120
悪巧み 127
悩みの種 135
覚悟 143
暴走 153

推理 157
前準備 163
やんちゃ 169

始まり

▼

世界の輪廻に囚われた私が世界を終わらせ、世界を始める。
終わらせるのは私であり、新世界を享受するのは私兵だった。
でも気づけば同じことを繰り返すのだ。何度も何度も飽きもせず何度も。
違う選択をとろうとも世界は同じ終焉を迎える。逃れようと動いたこともあったが最終的に世界は終わる。
私は覚者と世界に呼ばれ、その覚者にはポーンと呼ばれる私兵がいた。
輪廻を受け入れ始めた覚者にとって最初から輪廻に囚われたポーンは唯一縋れる道しるべだった。
そもそも覚者は人であり人ならざるもの。一般的にファンタジーと呼ばれる世界観でドラゴンやキメラ、死神などと戦う。それがその世界の使命。
覚者は竜に使命を与えられる。「私を倒せ」という使命を。
使命を受けるとき、人から覚者に成るとき人は竜に心の蔵を奪われるのだ。

そして躍起になって取り返す。己の大事なものを。
逃げるなんて選択肢があるわけがない。そんな大事なものを奪われておちおち過ごせるわけがない。
人の数倍はあろう竜を私兵と共に倒す。
それは難しいようで簡単なのだ。
人であり人ならざるものが覚者なら、私兵であるポーンは人のようで人ではないものなのだから。
ポーンは覚者を助けるのを主とした生物。死んでもリムという石があれば無限に呼び出せる兵器。逆に言えばそれがなければ替えのきかない兵器に成り下がるが。
なぜ、こんなことを思ったかといえば私は覚者だからだ。
そして世界の輪廻に囚われていた。
そのはずだった。
竜を倒し続ける。
そのはずだったのだ。
いつもどおり竜を倒し世界を救い。目が覚めればまた世界を巡る、世界が巡る、そう思っていた。
そして目覚めれば目に入ったのは大きな木。一度も世界で見たことがなかった大樹

だったのだ。
そして時期といえば夜。人の姿など見えない深い夜。
だが気配はある、人のものとは限らないけども。
世界を旅した私が世界で見たこともない木が生えているってことはここは私の知るセカイではないんだよ。
でもさ、人の形をしたものがオーガに襲われてれば体は勝手に動くし言葉が通ずると思っていなくても声をかけて無事を確認するさ。しかも襲われているのは少女。現状を理解できなくともそれだけはさせて欲しい。
慣れた手つきで背にある魔導弓を番え魔力でできた矢をオーガに撃ちだす。それ以上の魔力を込めてない普通の矢だったのにも関わらずオーガは一撃で消え去る。
弱すぎる、いや当たった音からして破裂音のようなものだった。あれはなんだ？
いやそんなことより今はあの少女のことだ。
他にオーガの姿は視認できず、とりあえずは少女の無事を確かめようと構えていた弓を背にしまい声をかけた。「大丈夫？」と軽く一言。そこまでは普通だった。
だけどさ、助けた少女が剣を私に向けるなんて思うわけないじゃないか。

見知らぬ女

▽

しくじった。

学園での習慣である夜の警備で私は思わず舌打ちをした。

言い訳をいうわけでもないが鬼の一匹に隙を突かれ転倒し行動不能に陥った。

このかお嬢様を護衛するために力をつけたのにも関わらず一方的にやられ龍宮の援護も期待できない状況に落ちやられ今の現状に至る。

「なんや、少しあっけないのぅ嬢ちゃん」

「うるさい」

鬼にそう言われ私は悔しく唇を噛み小さく悪態を吐く。

そして鬼は契約者のために「すまんな」と言い責務を果たそうと己の武器で私に止めを刺そうと腕を振るう。その事実に私は思わず目をつぶった。

しかし何時までたっても衝撃がこない。

目を開ければ目前の鬼が魔法でできた矢に穿たれ消える瞬間で、矢が飛ばされた位置

であろう場所からは私より少し大きいかと思われる少女が現れた。日本語ではない言葉を私にかけながら。

その少女の顔はわからない。体格は女性のソレであり髪型もその通りなのだが鼻から首にかけて異形の口を模したマスクを覆っているせいで顔がわからない。

見た目少女なのだが少女の格好も怪しく、よく言えば物語に出る盗賊、悪く言えば変質者の格好だった。どのみち褒められた格好ではないのだ。

背には異様な形の弓、腰には短剣やら長剣、そして特殊な形の矢筒。御伽噺の……それも物語の終盤で戦争にでも行くような重武装がその少女の怪しさにより一層拍車をかけていた。

私の考えがわかったのかわからないが少女はマスクを慌てて下に下げ私に微笑む。

助けた私を安心させるように伝わっていないとわかっていながらも心配そうな声をかけてくれた。

そんな彼女が悪い人とは思えない、思えないのだが……。

見覚えもない。鬼から私を助けてくれたのだが、私には学園からの責務がある。

心苦しいと思いつつもその少女に私は夕凪を構え口を開く。「あなたは何者ですか？」と。

というかやっておいてなんだが、日本語がわからないのか少女はあたふたしていた。

どうして良いのか知れず戸惑っていた。
そもそも日本語を喋っていない時点で日本語が通じないのに私は何をしているのだろうか。世界共通の言葉で示せば良かったのだろうか。確か……ふーあーゆー？　もう少し英語を嗜んでれば良かった。今更ながら後悔した。

そして更なる問題が起きた。いや起こしてしまったのは紛れもない私なのだが、突然の事態に私は動揺しすぎていたのだろう。
一見してみれば私が夕凪を相手に構えながら倒れこむ、こんな現状を学園関係者が見ればその少女を敵だと言っているようなもの。助けてくれたという事実を私は自らの行動で否定している。
これがもし、相手の手を取り言葉が通じないからとは言え話している姿だったならこんなことはなかっただろう。
先の話に出てきた龍宮の援護が期待できないというのは今はほかの鬼と戦っているからという理由の上での話だった。
つまりは今は鬼もおらず援護はできるということ。そしてそうなればこの現状を見た龍宮の行動は簡単なものだった。

軽い発砲音。知っている者からすればそれは彼女の射撃音。目前の少女は聞きなれない音なのか首を傾げるが咄嗟に跳躍し後ろに引いた。

彼女が引いたことにより龍宮の弾丸は虚空を穿つことになる。そんなことわかっていたというようにタン、タタンと連続して発砲音が鳴る。

そしてその次弾は少女を穿とうと迫る。同じ場所から撃たれたと思えない立体的な射撃を少女は戸惑いつつも避けていた。とある一点を睨みつつ。

▽

私、龍宮真名は焦っていた。

仕事仲間である桜咲刹那が負けたということよりも狙撃場所を悟られるわけにはいかないと跳弾でその不審者を撃ち続けているのにも関わらず、私を見続けている不審者に。

一発目を避けたのはわかる。あれは威嚇を込めた一撃。中れば御の字程度。

だがそれよりも後の次弾は別。あれは刈り取る気で放った攻撃。それすらも避けて私と視線が合う。それこそが私の焦り。

見た感じ不審者はなんの力も使っているように見えない。武装こそすれそれほど驚

異に思えなかったのは間違いだったか……。いや違う、私は少なからず奴を侮っていたのだろう。刹那が負けたからといえ私よりも強くはないと勝手に侮っていたのだ。

私の魔眼をもってしても力を感じないのに不審者はこちらを見ていた。スコープ越しですら霞んで見える距離をなんの疑いもなくそこにいる私と視線を合わせ続けているのだ。

口の動きを盗み見れば「Ｉｎｃｏｍｐｒｅｈｅｎｓｉｂｌｅ」だろうか。訳が解らない？　そんなの私が言いたいよ。

刹那をあそこまで追い込んで、それでいて私の攻撃を躱し続けるお前が一番訳が解らん。

だが、その逃亡劇も終わりだと言わんばかりに私は空になったマガジンを捨て新しいマガジンを装填したその時だった。

背にある武器（弓だろうか？）を構え矢を真上に放った。矢など構えた描写はなかったことから、矢は十中八九魔法でできた矢だろう。相手の行動の意図が掴めず私はそれを目で追った、追ってしまったのだ。

それを真上にだ。放たれる矢を、その攻撃を目で追ってしまった私を誰が責めようか。

白いその矢の正体はすぐにわかった。気付く頃には遅かった。あれは……。

放たれた矢は見上げた先で軽い空砲音とともに破裂した。
白いと思っていたのは強い光だ。それが空中で爆発した……そう思えるほどに強い光を出した。まるで夜が朝のように思えたほど強い光を出した。擬似太陽と思える程の光。
夜に慣れた目が突然の光にあてられ腕で庇う。攻撃としては上等な手段だろう。
何より姿を晦ますには充分な破壊力だった。
光が消え視線を戻した時には刹那は立ち上がり、他の魔法先生から鬼が消えたという報告が殺到するレシーバー。そして最初から居なかったかの様に消えた不審者だった。
後に合流した刹那から詳細を聞けば、過剰防衛だったと思い知らされたわけだが。

誤解と誘惑

▼

剣を構えた少女の行動はわかった。それは暫く経ってからだけどさ。誰だってこんなマスクをつけたまま話されたら戸惑うと思う。だから外したんだけど……やっぱり言葉が通じない。何か言われたんだけど聞いたことがない言葉だった。

あの竜ならきっと通じるんじゃないかと思わず歯噛みした。

しかして聞きなれない音が鳴る。

そして高速で空気を裂く音、それは私に向かってきていた。攻撃？　いやこれはきっと警告だろうか？

とりあえず後ろに引く。地面にそれは吸い込まれるが矢ではない。魔弾でもない。だが当たれば痛そうではすまないほどめり込んでいた。

そして音はまた響く。訳が解らない。なんで私が狙われなければならない。そしてそれを行ったであろう少女を軽く睨む。この攻撃は少女に一切向けられず私だけを狙っていたのだ。

ならば少女を助けたはずの私が狙われているのは可笑しいではないか。
いや、待てこれが始まったのは何時からだ？　確かその少女が私に剣を向けてから起きた出来事ではないか？　ということは、だ……つまり勘違いか。
勘違いで殺されてたまるか。でもこの少女といい言葉が通ずると思えない。
ならば私に残された道は投降か逃亡。投降はいつでもできる。なら今は逃げよう。
怪しいからとは言え、説得もせず武力で行動する人たちに投降なんてする気はない。
背にある魔導弓を構え魔力を込めて放つ。放たれる矢は閃魔光。閃光を放つ魔力でできた矢。効力は一瞬でいい。溜めずに放てば効力は一瞬。
閃魔弾は人に害はない。あっても眩しい位。だが魔に属するものは違う。
スケルトンであれば弾け飛ぶし、オーガであれば体が燃える、ゾンビなら太陽を浴びた時と同じ効果だ。ならばあの弱いオーガ達もこの一撃で消え去るだろう。
閃魔弾光が破裂し目前の少女を立たせ通じない言葉だろうけどかける。さようなら、と。
後ろ髪を引かれ過ぎ去る足を止めずに振り返れば少女は虚空を掴むように私に手を差し伸べようとしているところだった。

ここまでくれば安全だろうか……。先程の戦闘があった場所からだいぶ離れたとこ

ろで私はようやく走るのをやめた。
呼吸を求める体を安心させるように深く息吐く。さて、どうしよう？
なぜか分からないがここまで重装備なのに息が乱れない。それはそれで嬉しい誤算なのだけれども。
少女と言葉は交わせなかったが、大人とはどうだろう？　まさか少女だけしかいないわけがないだろう。
でも誰が好き好んで武器を携える私に声をかけるのだろうか……言葉も通じないし……あの場で逃走を選んだ私は相当焦っていたらしい。
ポーンがいないというのは不便だな……あの時はうざがるくらいに助言してくれていたというのに。

少し歩けば灯りが見え街が見えた。
その灯りは火でできたものではなく魔力でできたものでもなく、全く知らない原理でできているようで、私の知る世界にはない光源だった。
時間は夜だから人通りなどなく結果を言えば暫く人など見つからなかった。
要は暫くしたら見つかったのだ。眼鏡をかけた若い男性だった。
精神的に歩き疲れ道の横にある椅子に座り休んでいる時に彼を見つけた。

微かに魔力を感じるがあの少女たちと違い敵対する意思は感じない。ならば私がすることなど一つだけだ。

藁にもすがる思いで私は話しかけた。「すみません、いきなりで悪いのですがここは何処ですか?」と。

声をかけられて一瞬戸惑ったが彼はすぐに答えてくれた。

少し訛ってはいたがきっと無理をして合わせてくれているのだろうとすぐに理解できた。それに私の武器を見ても恐れていない時点で先程の少女たちの関係者だろうとも。

「あまり上手く喋れないのだけど通じてるかい?」

「大丈夫です。お上手ですよ」

「ありがとう。ここは麻帆良と呼ばれる学園都市です。聞き覚えは?」

「……いえ、残念ながら」

「なぜ、君はここに?」

「えっと、信じてくれるかわからないのですが……ちょっとオーガに襲われて」

「……厄介なことに巻き込まれましたね」

「――それ自体は大変ではなかったのですが、続きがありまして……。襲われていた少女を助けたらその少女に片刃の剣を向けられて、戸惑っていたら別の場所からも攻撃さ

れて、目晦ましを置いて逃げてきたんです。助けた少女に言葉が通じなかったのでどうしようか悩んでいたのです」

その話を聞いて男性は心当たりがあるのかこめかみを押さえて唸っていた。

最初はとぼけるように言っていた彼も私の話を聞くにつれ悩むかのように深く唸っていた。そして話しにくそうに言った。

「もし予定がないのでしたら今からご同行願えますか？　大丈夫です、悪いようにはしません」

「え？」

「あぁ、勿論攻撃はさせません。助けてくれた恩が返せるかわかりませんが不自由なことには絶対にさせませんよ」

「では……不躾ながらお願いします」

「向かいながら何度か質問しても？」

「それくらいなら喜んで。もちろん私が答えられるようなものだけですが」

そして私は彼の後に付いていった。

年不相応にはしゃぎつつ。

彼女の名前

▽

いつも通り麻帆良の夜警をしていた時にそれは起きた。
突然空に光が出たと思えば辺りに居た鬼が消え去るという現象。そしてそれを起こしたのは魔法先生やエヴァではないということだった。
刹那君の報告では鬼から助けてくれた少女がやったらしいのだけど……言葉が通じなかったと僕が見ても焦っている表情で言っていた。
龍宮真名君から聞けばその少女は英語で喋っていたそうで刹那君にはもう少し英語を頑張ろうか、と呟いたのはきっと気のせいだろう。
麻帆良とはいえ、あの広域にいた鬼たちを一発で全滅させた少女をただで帰す訳にはいかない。刹那君の話では敵対してはいなさそうだが警戒はしているだろう。
そもそも、それは一度会話をしてみないことには判断できないのだが……。
その出来事が起きたのはついさっき、ならまだ近くに居るはず……そう思い探してみればその子は居た。

街灯に照らされるように椅子に座り休んでいた。
武器を持ってさえいなければここまで目立つこともなかっただろう。そこだけは感謝しておこう。
そんな彼女は僕を見つけるとどうしようか悩んだ挙句声をかけてくれた。
綺麗な英語で。「すみません、いきなりで悪いのですがここは何処ですか?」と。本場の英語でもここまで発音が良くないだろうな……と、どうでもいいことを考えるほど綺麗な英語だった。
……軽く現実逃避してしまった。綺麗な英語を喋る彼女に不安ながらに英語で返答をすればやはり件の少女だったらしい。
背や腰を見れば刹那君たちの証言にもある武器の類も確認できた。
話が通じないというものだから手荒なことになると思っていたけど……そんなこともないようだ。
流石に僕一人で判断はできなさそうだから学園長に任せよう。それまでに彼女の情報をいろいろ聞いておこうか……。
「そういえば名乗っていなかったね。僕の名前は高畑・T・タカミチ、タカミチと呼んでくれ」
「私はユキ、好きなように呼んでくださいタカミチ」

話をすれば彼女は気づけばここにいたと自身でもわからないことだらけらしく、お手上げ状態だった。
それでも放置はできない。魔法を一般生徒の前で使われるわけにもいかない。
些か従順すぎな彼女の対応に少々戸惑いながらも校長室に連れて行った。

▼

タカミチに会えてよかった。言葉が通ずる人に会えてよかった。
なんでもこの世界ではオーガなどの生物がいることは隠蔽されているらしい。この学園都市の一部の生徒、先生はそれを内密に処理している。とまで聞いた。
内密に処理しているなんて聞いたときは己の行動に思わず顔が熱くなってしまった。一瞬とは言え閃魔光を打ち込んでしまったのだ。そのことで謝罪すればタカミチは悪気があったわけではないし鬼も消えたから特に問題はないよと言ってくれた。何かあっても誤魔化しておくしとも。
言葉が通じるだけでとても信頼してしまうのはきっと気のせいだろう。
知らなければ幸せなのだ。私だって覚者の使命なんて知らなければきっと今頃幸せになれて……居たのだろうか？

ありえないことがあたりまえになりすぎて感覚が可笑しくなっていた。
今更ながらに「学園都市」という言葉が気になって聞いてみれば大人が子どもに勉学を教える場を学園と言うらしい。ここはそれがたくさんあるから学園都市という。なるほど。
そこで一番偉い人に私の今後を聞くという。その人は何処に居るのと尋ねれば女子中等部、そして性別は男性。え？
タカミチはそこの先生。少女たちのことを聞けばそれもそこの生徒らしい。
「あの子たちに謝りたいのですけれど……」
「たち？　片方は助けたんじゃ？」
「知らなかったとは言え警戒させてしまいました。翻訳を頼まないとそれもできませんが」
「……わかった。僕でよければ協力するよ」
「ありがとうございます」
彼は良き先生なのだろう。偉い人に会った後に会わせてくれると言ってくれた。
夜も更けず朝に満たないこの時間で校長室とやらに到着した。
人目を憚ってとかそんな理由らしい。お世話をかけます。
部屋に入ってみれば後頭部の長いお爺さんが居ました。どんな人かとタカミチに聞

けば会ってみればわかるとのことだったから、これは正直に驚いた。
私のことを詳しく知りたいとお爺さんが言い私はそれに答えた。
彼らからすればとてもファンタジーなお話だったようで注釈を入れつつ、とても長く話した。
この時ほど覚者で良かったと思わずにはいられなかった。説明なんて簡単なことだ。私の心音を聞かせれば一発だった。いちいち説明するのも面倒なので頭を掴んで胸に当てる、単純明快。
そしてこれからの事を話そうということに。
結果から言えば私はこの学園で日本を学ぶという留学生になり、彼らの言葉を学びつつ学校に通うことに。衣食住も用意してくれるらしく私にとっては嬉しい限り。
彼女たちに謝るのは日本語を理解してからとタカミチと話し終え、そこだけ先に重点的に覚えることにも。
もちろん、ちょうど良い機会なので学園に通い始めるのもある程度言葉を覚えてから。制服というのを着させてもらい今は日本語のお勉強中。
「『ありがとう』これは感謝を表す意味だよ」
「『あぃがとぅ？』」
「惜しい、子音にもっと力を込めてみて」

「『ありがとう？』」
「そうそう、良くなったよ。でも語尾を上げると問いかけの言葉になる、気をつけてね」
「『ありがとう！』」
　新しい言葉を覚えるというのは新鮮だ。褒められるのも慣れていないせいで楽しくなる。一応音として『あかさたな』は覚えた。でも発音は難しい。
　単語としては今やっている『ありがとう』や名詞からじっくりと。
「『ごめんなさい』これは謝罪の意を持つ言葉」
「『ごめんください？』」
「それだと違う意味になるね。もう一度言ってみようか『ごめんなさい』だよ？」
「『ごめんあさい』」
「やっぱり子音が弱いね。あ行をもう少し重点的にやろうか」
「……ぁ！『おねがいします』だね」
「そうそう。今のは良い発音だったよ。使い方も合っているしその意気だ」
　言葉とは違うが座り方や習慣に関しても学んだ。
　正座を初めてしたときはなれない動作に足が攣った。慣れればどうにでもなるらしいけど無理はしないようにとも言われた。
　日本の人たちは靴を脱いで家に入るらしい。聞いて思ったが確かにそれはいいと思

う、物は多くなるが長く保つ。いいことじゃないか。

朝から晩まで飽きもせず休憩もなく教えてもらう。でもタカミチには悪いので彼に直接教えてもらうのは暇なとき。タカミチがダメな時は学園長に教えてもらっています。でも学園長の教え方は私には無理っぽい。語尾に『じゃ』を付けるせいでわかりにくくなる。覚えてから気づくと治すのに時間かかるし。

学園長と話していると戸籍というものを作るのに私の承諾が必要とのことで二、三受け答えさせられた。

もちろん『おねがいします』に始まり『ありがとう』で締めます。まだまだ片言らしいけど先生たちの顔が優しげだった。

戸籍というのと関係あるかわからないけど誰の家族がいい？　とか、誰と一緒に居ると楽しい？　とか関係あるのだろうか？　そもそも戸籍って何？

はかりごと

▽

『ユキ。苗字や名前の概念はなく名前を聞かれ即答。
性別は女性。年齢も不明。外的年齢は１４、しかし見た目通りではないとのこと。
魔力量不明。出身地不明。身体能力未知数。
鬼の襲撃を一撃の魔法の矢にて殲滅。
同日、魔法生徒との接触、戦闘も無傷にて逃走。
麻帆良の結界があるのにも関わらず認識阻害や言語に変化が見られない。
対魔力障壁に関して才あり。
現代社会に疎く機械を知らない。曰く『おとぎ話の登場人物』
また、動物に関しても疎い。家畜の存在は知っていたがペットの概念を知らなかった。
弓術、武術、剣術、杖術に心得あり。しかし柔術に関しては存在すら知らなかった。
正座ができない。

日本語を学ぶのを嬉々としている。
りんごとぶどうが好物。』

わからないことが多いだろうからテキトーにと頼んだ結果こうなった。いやいいんじゃけども。正座より後半情報としてどうなの？　いやいいんじゃろうけども。
ちなみに名に関しては、これ以外になかったと意味深じゃった。
戸籍のことで丁度思い悩んでいたからこれ幸いと彼女を呼び出し質問する。
もともと日本人らしい名前で良かったわい。
当たり障りなく、勘の良い彼女に悟られんようにワシは問いかける。
彼女はよく言えば素直な子、悪く言えば言いなりになる子じゃった。
それと覚者じゃったか。初めて証明してもらったときはその行動に度肝を抜かれたわい。いろいろな意味で。
意図を悟られないように質問を終える。交渉事よりもこういったことの方が慣れないから疲れるのぅ。
ワシの関係者にするよりタカミチの知り合いということにしようかの。本人もそれを望んでおるようだし。なにより先生方にも説明がしやすい。
父のように慕っておるから恋愛に発展することもなかろう。いや実際に父さんと呼

ばせてみようかの？　ふぉっふぉっふぉ。

「その笑い方、嫌いです」

素の表情で言われた。しかも覚えたての日本語でハッキリと。思わずワシの時が止まったものと錯覚するような破壊力だった。ワシ泣かない、だって男の子だもん。

部屋から出る時にゴミを見る目で去っていった。ワシ笑ったの心の中のはずじゃよ？　なんでわかるの、いやそもそもそこまで否定的に言わなくてもいいじゃない。

彼女が去って気を取り直そうと書類に目を通せば見慣れない紙がひとつ、無造作に置かれていた。慣れない字で必死に書いたのであろう文字はこう書かれていた。

『でも、学園長先生は好きです』

素直に嬉しいんじゃが、園の字がちと惜しいのう……。

コンヴェンション

▼

「あの子達に会える？　本当？」
「あぁ、本当だとも。それに彼女たちと同じクラスになるよ」
そうタカミチから説明を受けたときは両手を組み合わせて喜んだほどだ。学んだ日本語はまだ片言だけど初めて伝えるのは彼女たちにって決めてたし。
「それは何時から?!　すぐじゃなければちゃんと勉強しないと！」
「焦れば焦るほど上手くいかないよ。ちゃんと復習はしたかい？　そういえば漢字のほうはどうだい？」
「それなりだよタカミチ。やっぱりひらがなの方が楽だけど覚えたほうが楽しいね」
まだ綺麗に言葉を喋ることはできないが、読み書きはうまくいった……と思う。
タカミチが言うのは……だから学園生活でどうなるかは一切不明。
覚者として生を受けた私が、学校という施設にて異国の言葉を学び生活する。
今思えばとても嬉しいものだった。輪廻に囚われることもなく過ごせるなんて思い

もしなかった。
聞けばクラスメイトというのは同じ部屋にて一緒に学ぶ人たちを言うのだそうだ。
それと疑問に思うことは多々あるだろうけどあまり詮索してはいけないとも言われた。
魔法に於いてはバレれば罰が与えられると、では覚者は……というか心臓がない時点で嫌われるか。人は人と違う部分を嫌う生き物だから。
麻帆良には常識と非常識の境界を曖昧にさせる結界が張ってあり、なんとか誤魔化しているそうな。本来なら言語の違和感をも作用されるらしいけど私には効果がないらしく、そのため日本語を学んでいる。
というよりも部外者を受け入れてくれるだけでも私としては素晴らしいと思う。
だって言うなれば私は異物なわけで、非常識で、化物だから。

▼

会わせたい人がいる。そう言われやってきたのは学園長室。
私が入るクラスに関しての注意事項だとか、エヴァと呼ばれるタカミチの知人との顔合わせが主な内容だった。

警備にて起こりうる問題を排除するとのことで行われたそれに私は重い足取りで向かうのだった。

学園長室に入れば人形のような金髪の少女と、耳にアクセサリー（？）を付けた召使いの格好をした女性が居た。

そしてその二人と視線が交わる。

人形のような少女は私を品定めするように見つめ、もう片方は軽く会釈をしてくれた。

とりあえず何も反応しないのは失礼なのでこちらも軽く会釈を返しておいた。

「あぁ、来たようじゃの」

「遅れました」

小学、中学、高校とある程度説明を受けて私は中学というのに配属されることとなった。そしてタカミチの知人はとある理由で同じクラス。

そのクラスは元気が溢れかえっているのが普通という、ちょっと他よりはだいぶ浮いた印象のクラスのようだ。

元気がありすぎてタカミチ含む先生方が手をやいているほどらしい。

人形のような少女は人形遣いの吸血鬼らしい。彼女は魔法世界に於いては有名で名を知らぬ者はいないほどだそうだ。人形のように別嬪だと思ったけど人形師だとは思

わなかった。吸血鬼の弱点はある程度克服しているらしい。なにより閃魔光を受けていたのにも関わらずダメージがなかったのだ、相当素晴らしい吸血鬼なのだろう。人の味方もしているみたいだし。（本人は乗り気ではなさそうだが）

そしてその隣にいる少女。人だと思っていたけど人形？　らしい。正確には機械人とかなんとか……そもそも機械ってなんだろう？　時計とかいう硝子と鉄でできた箱とかと同じってことだろうか。

疑問ばかり浮かんでいる私に見かねたのか、少女はからくり人形のことだと説明してくれたのだが……からくり？　あぁごめん、説明してくれたのにも関わらずわからなくてごめん。

こいつ本当に大丈夫か？　みたいな目で見られましてもね……。

そんな私に見かねたのかタカミチが「風車のように特殊な仕掛けで動いているんだよ」そういって助け舟を出してくれた。

なるほど。

「おまえ、なかなかにやるそうじゃないか。きいたぞ？　あの小娘の狙撃を完全に避けたそうじゃないか」

「狙撃？　あぁ、あの時の不思議な遠距離攻撃。弓でもなく魔導弓でもない変な遠距離攻撃」

「なんだおまえ銃も知らないのか？　よもや私よりも時代錯誤の人間がいるとはな……いや人間ではなく覚者だったか」
「銃？」
私の問いが心底可笑しかったのかエヴァはくつくつと笑う。
首を傾げる私に気をよくしたのか何でもないと手を振り私の問いに答えてくれた。
へぇ、便利な武器があるんだなー……。
「よしっジジイ！」
「な、なんじゃい」
「こいつ借りてくぞ。茶々丸、行くぞ」
言うが早いか私はエヴァは私の腕に自分の腕を絡めて校長室から私を連れ出した。
引きずられかねない強さで引かれる手に負けないように付いていく私を学園長は心配そうな視線で追うのだった。
「ちょっ、学園のお話するんじゃ!?」
焦る私を見て何故か微笑んだエヴァは走る速度を上げるのだった。……なぜに。

話頭の中心

▽

ジジイから聞いていたがここまでとはな……面白い拾いものをした。

先程までの鬱屈した心情など忘れたかのように私は隣にいる奴を見る。

『覚者』のことをジジイから聞くまで信じる気はなかったが……ジジイの言っていたことは本当のことだろう。全てがそうとは限らないが、な。

――心臓がない。これに於いてはすぐに気づいた、なにせ心音が聞こえないのだ。脈はある。だが心音だけは吸血鬼の聴力をもってしても聞こえなかった。

――酷い時代錯誤。タカミチがいうにはテレビでさえも存在すら知らず先程の会話からわかるように銃の存在すら知らなかった。からくりという言葉すら……だ。

――並外れた身体能力。腕を引いたときに壊れない程度に力を加えてみたが痛がる素振りすら見せず負けじとついてきた。竜に敵うかどうかはまだわからないが……。

――人と思えぬ魔力量。隠蔽も然ることながら練度、精度、純度……どれもこれも高水準。これがもし覚者とやらの絶対条件だったとしたら……。

そもそも覚者とはなんなのだろうか、それを知るためにこいつを借りたわけだ。
竜と戦うというのはきいた。だが何のために、それでどうするのかを答えてはいない。そして麻帆良にいる理由も――だ。もしも理由なんてなくただ居合わせただけならその時はその時だが。

足早に我が邸に到着する。驚いたような顔は見せなかったので（家屋に関しては時代錯誤に当てはまらないのか？）問いてみれば材質は違えど似た形だったらしい。それもそうか。きっと日本家屋だったら別の反応が見れたのだろう。……面白くない。
説明もせずに連れてきたとは言えこいつは客だ。茶々丸に茶の準備を任せ居間に案内する。話も長丁場になるだろうからな。

▽

「スクープ！　スクープだよー！」
麻帆良学園女子中等部Ａ組でそんな声が響く。嬉々としたその声を聞いたＡ組の面々は「また朝倉か」だの「今度の被害者は誰だ」だの興味深々に、かたや呆れたようにそれぞれ反応していた。

そんな情景を私こと長谷川千雨は最初、興味なさげに見ていた。神楽坂の奴も最初は私と同じ反応だったが朝倉に言いくるめられたのか今では興味津々で話に聞き入っている。

何せ「高畑先生」関係のことだ。食いつかない訳が無い。

驚いたのはマクダウェルも朝倉の話に耳を傾けている事だろうか。だからこそ興味がわいた。

視線や態度は興味ないように見せつつも朝倉の言葉に耳を向ける。

「我らが担任の高畑先生に年端も行かぬ美少女反応！　しかも親しげに笑い合う関係！　そして会話は英語で話し合うという徹底ぶり！　これがスクープと言わず何と言う!?」

「ううぇ……」

鼻息荒々しく告げる朝倉に若干引く奴もいるが、内容が内容だけに他の奴らの興味は尽きず食い入るように先を促す。おっ？　珍しく超の奴も食いついた。

「綺麗な英語だったから翻訳も割と楽でね、一言一句逃さず録音してみれば、美少女の名前はユキって言うらしく高畑先生と名前で呼び合う仲だったよ」

「……私でさえ君呼びなのにぃぃ」

あ、神楽坂が白くなった。というか朝倉はその熱意を勉強に活かせ……私も人のこと

言えないけどよ。というかそもそも録音すんなよ。
そもそも英語での会話の時点で……いや、おサルに言っても無駄か。
「そしてそして！　極めつけは～～っ」
「「極めつけはっっ?!」」
「な、ななんと！　笑い合い手を仲良く繋いでいたのだっ！　はい、これが証拠写真」
「「おぉぉぉ～～～!!」」「「っ?!」」
高らかにあげる写真を微かにのぞき見れば確かに見知らぬ美少女と仲良く手をつなぐ高畑先生の写真だった。これには神楽坂も灰となっていた。
でも写真があげられた瞬間、桜咲と龍宮が変な反応していたけどなんだったんだ？
まぁいい、有って無いようなもんだがＨＲの時間は潰れるなこりゃぁ……何れ来る衝撃を浴びる高畑に私は心の中で合掌するのだった。

▽

あの人は!?　そう思い視線を龍宮に向ければ彼女も私と同じような顔で驚いていた。
それも一瞬の出来事で、驚愕したのはクラスの人たちにはバレなかっただろう。バレても逃げの言い訳はたくさんあるが。

高畑先生と面識が……いやあのあと会った時はそんな素振りは見られなかった、だとしたら知らなかったが関係者だったのだろうか、はたまた……。

もしこのかお嬢様に仇をなす存在なら……しかし彼女には助けてもらった恩義が……そもそもそんなことじゃ釣り合わない。私にはこのかお嬢様の方が大事だから。それに高畑先生と関係があるのなら学園長とも面識があるはずだ。学園長にあの話は伝えてある、それなのに私たちにその報告が一切ない……というのもなんだか可笑しくないか？

だったら……よし、一度学園長に問いてみるか。ユキと呼ばれる少女の事を。龍宮も驚いていたということは彼女も知らなかったようだし……あとで二人で行こうか。

「まさか、関係者だったとはね……」

「そのようですね。ですが朝倉さんのお話を鵜呑みにする訳にもいきませんし、一度問いただしてみましょうか」

「それもそうだね。流石にＨＲとかで高畑先生が漏らすわけないし、そうしようか」

案の定ＨＲや授業中に朝倉さん達が問い質していたが高畑先生はやんわりと回避していた。あれが大人の対応というやつだろうか。でも妹みたいなものだって説明は苦しすぎるのではないでしょうか……。

――っと、いけないいけない今は勉学に集中しよう。

そして授業が終わり次第、龍宮と学園長室に向かう約束をしたのだった。

彼女との遊び

▼

――――なぜ、私は今本気で戦っているのだろうか。

聞きなれない詠唱と共に飛び交う魔法矢を短剣であしらいつつソレを今も射出している彼女を睨む。その彼女は新しい玩具で遊ぶように嬉々としたイイ表情をしていた。

それを見て諦めたように背にある魔導弓に矢を番える。別に殺すわけではない、ただのお遊びだ。そんな台詞と共に行われたこの戦いは最早私にとっても彼女にとってもやめられない戦いになっていた。

何が私は力を封印されているから簡単だろう？　だ。せめて装備くらいはちゃんと持ってくるべきだった。

「驚いたよ、覚者と呼ばれる見た目ただの子供がこんなに戦えるなんてな」

「貴女よりは大きいと思うけれど？」

「ふふ……ふははは、いいだろう挑発と取るぞ小娘」

「やってみろチビ」

言われたままで気が済むわけがなく売り言葉に買い言葉で罵声し合う。実力は多少こちらが有利とはいえ私も彼女も切り札を切れないでいた。いや私を含め切れないのだが。

彼女は力を封じられているからそれができず、私といえば持っていた武器しかないのが悔やまれる。今の私ができることといえばソレの真似事の職業くらいなのだ。錆びた武器だったとしてもその武器さえあれば多少なりとも勝率は上がりそうだ。最もいま腰に下げている短剣は彼女に対しては絶対の攻撃力を持っていそうで罵声を使い合う仲とは言え使う気になれないが。だからといってそれを振らない訳ではない。握り手で殴るくらいはするが。

途中口を開いたかと思えば数多の魔法矢が空を覆い私目掛けて放たれる。最初は無様にゴロゴロと転がることで避けていたが、あれは特に追尾性能もないただの矢だったらしくそれがわかったあたりでは「追魔弾」で撃ち落としていた。

この世界……というか彼女しか見たことないが魔法を撃つには若干のタイムラグがあるようだ。ならば！

魔法矢を避け私は近場に落ちていた棒きれを回避行動と共に手に取ると彼女にめがけそれを構える。何も能力のないただの棒きれだがイメージは掴める、いける。最初は小手調べ、走りながらでも粗悪品位は出せる。

「ファイアボール！」
「っ!?」
　三点射で出せれば最高だったのだがソレはお世辞にも連続とは言えない速度で放たれた。勿論奇襲紛いの魔法とは言え彼女は横に跳ぶことで避ける。当たるなんて思ってない。だからこそ私は次を撃つためにもうイメージを固めていた。一発撃った事によって感覚は掴めた。
「フレイムウォール×３」
「なっ！　くそ」
　避けて体制を崩している彼女の周りに炎の壁を囲むように出現させる。粗悪品とは言えただの魔法矢で壊せるほどやわじゃない。それが分かっているのか軽視しないでも彼女は動けずにいた。背にある魔導弓に持ち替え彼女を狙う。それとともに魔法矢が赤く燃え上がる。
　手を離せばそれらは三つに分かれ不規則に動き彼女を襲う。咄嗟に魔法矢を放たれるが相殺されたのは二つ、一つは肩に突き刺さる。それと同時に腰の短剣を手に彼女に疾走する。
「ぐっ……ん?」
　刺さったのにも関わらず彼女の顔は苦痛に歪んだりしない。これは直接に損害を与

える技ではない。それにも関わらずそれは彼女に刺さったままだった。先程から放たれた魔法矢と違いそれらは頭が丸い鋲。その頭には先ほど煉られた炎が蠢いた矢。なのに熱くもなく痛みもない、困惑するのは最もだった。だからこその奇襲。遊びで私に喧嘩をふっかけた彼女が悪い。威力は抑えているから大事にはならないだろう。反撃を貰う可能性もあったのでかんしゃく玉を投げ込むのも忘れない。

壁の壁直前で飛び込み鋲の頭だけを短剣で撫でる。それだけでソレは発現する。

――――キィン

軽い耳鳴り音。鋲の頭が破裂し空気と混ざり合い爆散する。名前を「爆散魔鋲」、そのまんますぎて笑えない。

だが彼女は何が起こるのか、長年の経験故か初見にしろ片手で顔を覆うことで最小限に防いだ。私のときとは大違いの光景に苦笑が漏れる。私の時は赤い光の鋲としか思ってなかった。まさかそれが物理的な攻撃で破裂、誘爆するなんて露にも思わなかった。

「ごほっけほっ」

「……」

「――すぅ……はー……くくく、くはははー　こんな気持ちは久しいぞ」

呼吸を整えるだけで与えた怪我が完治した。回復速度が早いなんてレベルじゃない。

使うか？　いや短剣を使ってまで勝ちたいなんて思わない。あんなのでもタカミチの友人だ。ここまでやっておいてなんだができることなら穏便に済ましたい。
「遊びなんか目じゃない。有利だと思えば些か不本意だが同等だったとは、な。今回は私の負けだよ……このままやったら遊びにならなくなるからな」
「それはよかった」
「始動キーもない魔法なんて撃たれたんじゃ認めなくてはな。しかもただの棒切れでやられたんじゃ面倒すぎる。使うのを戸惑っているその剣まで使われたら現状じゃ辛そうだ」
　気づいてたのか。とは言わない。逆にコレを使わしたいとまで思っていたと思う。手札はまだまだあるがそれは彼女も同じ、力をセーブしている上に彼女は前衛がいれば力が更に倍増するタイプだ。詠唱によるラグがある分まだ楽だが好んでやり合いたくはない。
「だが私はしつこいぞ。目を付けられてしまったことに嘆くがいい」
「なら封印でも解いてから来い。それとも言い訳のためにそのままでやる？」
「……言うじゃないか。私が怖いと思わないのか？」
「……生憎とストーカー被害には慣れている。その程度ならどうとでもなる」
　視線をぶつけ思い思いのことを口にする。だが嫌味というより子供のじゃれあいの

ようだった。その証拠に私も彼女も口の端を微かに上げていた。

この日、悪友ができました。

▼

エヴァと知り合って暇があれば別荘にお邪魔する程度の仲になった。自宅のようなものがないので常時入り浸っていたりもするが。

ここでいう別荘というものは彼女専用の特別製であり、素晴らしい箱庭だった。

その時に私の「覚者」たる者の解説若しくは解ることを告げ、その度に彼女にこの世界の魔法を教わった。

流石にあいつのことは省いたけど。誰が好き好んであいつの話なんてするか……エヴァに頼まれたら答えるだろうけど。

せっかくあいつのいない世界で私としていられるんだ。【覚者としての私】ではなく【ただの私】でいられるのに。あぁやめよう、考えるだけで嫌になる。

この世界の魔法は私の世界の魔法よりも正直すぎる。

その理由としてはこの世界の魔法が詠唱を必要とするからだ。

基礎的な魔法でさえ詠唱が必要なのだ、この世界の魔法というものは。私がいた世界は詠唱する必要などなく（するものも若干あるにはあるが）基礎魔法に於いては詠唱の必要がないことが最大の利点だった。

だがこちらの魔法にも短所はある。それは杖を装備しなくてはならないこと。

彼女の世界の魔法は杖など必要なく媒体や媒介を使い魔法を撃つ。熟練者であればそのプロセスを無視して発動だってできるようだ。エヴァがいい例だったりする。

私の世界の魔法は杖の大小によりケーン、ウォンドと名前が違い、サイズにより撃てる魔法が違うのだ。粗悪品レベルであれば棒ぐらいで再現できるけども。

短いウォンドでは精々中火力の、それも火壁や氷柱といった自然の力を借りねば使えぬ魔法しか使えない。

でも回復の魔法はこちらのほうが長けているけども。

そしてケーン。これはウォンドと違い大災害とまで言われる事象を発現できるようになるのだ。ハリケーン然り、メテオ然り、クエイク然り。それらは私の世界では珍しく詠唱するのだが……。ブリザードアローやサンダーケイジはこの限りではないが。

流石にこの別荘では使わない。私だって安全だという保証もないのにエヴァを巻き込めるわけがない。彼女は喜んで「やってみろ」と鼻で笑いそうだけど。

ケーンは回復に対しては無頓着だが、治癒に関してはウォンドを超える。火傷や凍

傷、呪い果てや石化に対しても使える。即死してしまったらその限りではないけど十分だ。コカトリス相手に重宝したものだ。

でも彼女の世界にはその弱点を克服するための突破口がある。

例えば彼女の世界の詠唱なら高速詠唱や無詠唱などだ。何れも一朝一夕ではできず何度も反復して克服する……努力の賜物とも言える技術だ。

私の世界では竜王の指輪が此れにあたる。指に嵌めるだけで無いような詠唱が更に高速化、手がつけられなくなる。一応私の所持品ではあるが、私の私物ではない。簡単に言えば借りた。

もう少し詳しく言えば国王の所持品だったが窃盗犯に奪われそれを私が頂戴しただけである。何度か冤罪で牢屋に叩き込まれた恨みというやつである。一応女である私が牢屋でどんな目に遭うか考えなくともわかるだろう。もう慣れたものだが。

試しにエヴァに渡してみればただでさえ化物クラスの彼女がドラゴン並みの詠唱速度に強化されたんじゃないかと錯覚するほどだった。▪

エヴァは私でなかったら死人が出たんじゃないかと思うほど暴れた。

暴れたというか面白がっていたというか、まぁわかるけども。

とても指輪を欲しがっていたが流石にそれはあげれない。彼女に窃盗品は渡したくないから。あ、いや、借り物を又貸しするのはよくないからだ。

そういえば別荘……というか邸宅にてもうひとり知り合いができた。人と言っていいのかわからないがチャチャゼロという人形である。

エヴァの魔力で動かしているが自立しているので私としてはポーンみたいなものだと勝手に理解した。

自らをオレという彼女（彼かも?）とはゲームという道具で遊んだ。

手始めに触ったのはボードゲームというやつだ。聞きなれない言葉に首をかしげてみれば貴族がやる駒遊びみたいなものだとエヴァが解していってくれた。

見た目が怖い彼女だが懇切丁寧に教えてくれた。弱イ者イジメハ趣味ジャネェだってさ。

教えてくれたのにボロッカスでしたけどね。

エヴァは私に嘘でもいいから口を動かして高速詠唱をしているようにしておけと助言してくれた。

無詠唱でやるより高速詠唱でやったほうが相手が油断してくれるらしい。警戒されるのは面倒なので了承した。

それ以降のエヴァとのお遊び（嫌味だが）で利用していたけどエヴァ自身説明しといて教えるべきではなかったとか愚痴っていた。騙すのが馴染みすぎてエヴァのに勝

率が下がったからである。もともと高かった勝率が多少下がっただけなのに気にしすぎだと思う。それと射出するタイミングを自在にずらせるからだが。

だからって「えいえんのひょうが」から「おわるせかい」まで繋げなくてもいいじゃないか、本当に死ぬかと思った。心臓がないからって流石にやって良いことと悪いことがあるというのに。

あの時「構え直し」を使ってなかったら腕が使い物にならなくなるところだった。「火炎衣」でも良かっただろうけど。

仮契約

▽

「学園長、尋ねたいことがあるのですが」
「ふぉっ？　なんじゃい連絡もなしに二人してどうしたんじゃ」
あの（高畑にとって）散々だったＨＲから一日を終え私たちは学園長に詳細を聞きに来た。
「単刀直入に言います。ユキという少女のことを教えてください」
「ふぅむ……聞いてどうするのじゃ？」
「敵でないのなら私たちに何か言ってくれてもいいじゃないですか」
「それと勘違いとはいえ攻撃しちゃったしね、私たちはできれば謝りたいんだよ」
「……ふむ」
学園長は考え込むように口元を手で覆う。
渋る理由があるのだろうか。
「タカミチから何も聞いてないのかね？」

「特には」
「ワシの口からはあまり詳しいことは言えん。それでも良いかの？」
なるほど、渋っていたのは間違っているかもしれない情報を与えるのを悩んだためか。
だとすれば詳細を知っているのは誰なんだ？　やはり高畑が？
「一言で言えば敵ではない。今はこの学園に通うため日本語の勉強中じゃ、君たちと同じクラスに入る予定……といったところだの。いわゆる帰国子女ってやつじゃ」
「私たちへ情報を伝えなかったのは？」
「それは本人が希望したからじゃ」
彼女が？　というか同じクラスになるのか。
私は嫌われてるだろうし刹那が謝る時には一緒にいない方が良いだろうな。
誤解とは言え撃ってしまったのだ、そのほうがいいだろう。
「一応もう喋れるんじゃがな、新しくできた友達と遊びに行ってるところじゃよ」
「友達？」
「住む場所が準備できるまで遊びに行かせておる。時代錯誤というか現代社会に馴染めておらんのでそれも教わりにの」
「そうですか……わかりました。行こう龍宮」

「あぁ」
　十中八九今いるところは彼女のところだろう。あの学園長でも流石に高畑のところに住まわせることもしないだろうし……流石にないよな？

▼

「なぁ、お前私と契約しないか？」
「契約？」
　エヴァに呼ばれ行ってみれば開口一番にそう言われた。契約ってなんのことだろうか。
「私のような魔法使いとその従者が結ぶ契約のようなものさ。本契約と仮契約があるが……まぁ今私が言ってるのは仮契約だな」
　つまりは私で言う覚者とポーンの関係だろうか。本と仮についてよくわからないけど概ね合ってると思う。
　契約を結べば対象の潜在力を引き出す効果があるんだって。それって私に効果あるのだろうか……。
「それと通信もできる。遠く離れていてもな……どうだやってみないか？」

「構わない。あなたが私と契約をしたいのなら私はそれを尊重する」
「そうか！　よし茶々丸準備だ」
「了解しました」
　私の返事に彼女は喜んでくれたようだ。
　その後準備は円滑に進んだ。途中で待ちきれなくなった（？）エヴァにキスされた（言い方があれだが）事で契約が終わった。
　出てきたカードを眺め随分簡単にできるんだなと感心する。そしていつの間にか二枚に増えて私にも渡してくれた。片方はコピーらしい。
　ただ、描かれている竜に悪意しか感じない。なんでこいつを撫でているんだ。私はこいつに心臓抜かれたのになんでこいつと一緒に描かれなければならない。せっかく忘れようと思ったところにこれだ。悪意と思わずしてなんて思えばいい。
　ＶＩＴＡＥ？　その先はよく読めなかったが書かれた文字やカードは好きなのになんでこいつなんかと……。
　結局、覚者（わたし）は私になれないのか。
「そのカードにできることはいくつかある。大まかに言えば従者への魔力供給、従者の召喚、念話、潜在能力の発現だな。あとはそのおまけみたいなものさ」
「へぇ……」

「なんだ、なんか嫌だったのか？」
「あ、いや、違う。絵柄にあいつがいるから……エヴァのせいじゃない」
「あいつ？」
　エヴァの嬉々とした説明に思わず不貞腐れて返してしまった。
　私の返しに不自然に思ったのかエヴァも手元のカードを見る。
「随分大きいな。鱗からみて竜だろうが……なるほど、こいつがお前の心臓を奪った竜か」
「……」
「まぁいい。いや良くはないが説明に戻る。アデアットと唱えると私無しに道具が出せる、戻すときはアベアットだ。試してみろ」
　竜が描かれてるせいか嫌な気しかしない。アレが出てくる気がする。こっちに来るときにひとつも所持していなかったせいでそれしか出ない気がする。
「どうした？　出さないのか」
「……アデアット」
　私の手の中で蠢くアレ。出てきたのはやはりあいつらの心臓だった。人のものよりも大きく蠢くそれ。
「なんだそれは……人の臓物にしては大きいし形も違う……そしてなによりそいつが放

つ――」
「竜の鼓動。なるほど確かに……これに力があるのは間違いない」
「お、おい」
「エヴァ、もし私が壊れたらコレ使って。これは竜の心臓のようなもの」
「壊れたら使う？　いやそもそも竜の心臓だと？　これがか？」
「これは蘇生の道具。死したものを動かす道具」
「なんだとっ!?」
「私は吸血鬼とは違う。でもこれがあれば似たような事ができる……アベアット」
いつまでも握っているわけにはいかないそれを先ほど聞いた詠唱をして消す。あいつのことをたくさん思い出してつい終始怒気をあらわにしてしまった。
アベアットをしてから無言のエヴァを不思議と思い顔を覗き見れば唖然としていた。確か……鳩が豆鉄砲をくらう、だったか……そんな表情をしていた。そんな表情のエヴァは私の顔を睨みボソボソと何かを喋ると部屋を出て行った。
何かあったのだろうか？

邂逅

▼

なかなか戻ってこないエヴァに痺れを切らし私は外出させてもらった。気分転換もしたかったし。

茶々丸に伝手も借りずに外出したのは久しぶりだ……どこに行こうか。最初にここに来たときは外出というより放浪と言ったほうが正しいし……一応生活するための資金ももらっているから買い物にでも行こうかな。

あの時は夜だったしお店なんてやってなかった。今はまだ太陽も傾いていないし……よーし、まわるぞぉ！

そして外に出て真っ先に向かったのが飯屋だったりする。匂いにつられてやってきました。お金の計算は向こうと何ら変わりなかったし特に問題はないだろう。

それにしても見たことのない食べ物がたくさんある。ある程度はタカミチと一緒に居た時に見たけれど盛りつけ一つで見た目なんて変わるし味付けもタカミチとは

違って面白い。調味料……だっけ？　あれのおかげで本当に変わるものだ。今度教えてもらおうかな……。店先に置いてある多分サンプルというやつだろうか、本当に美味しそう。

「ん？　あれ……お前朝倉の言ってた……」

「その服エヴァと同じやつ……」

食い入るようにメニューを眺めていたらエヴァと同じ服を着た少女に出会った。

エヴァと同じクラスの人だろうか、もしかしたらあの二人と同じクラスの人なのかも知れない。今の私が人と話せるのか興味もあったので話してみる事にした。

気になるものは気になるのだ。タカミチやエヴァは日本語じゃなくとも話せるし、こどもと話すときのように学園長は優しい目で私を見るし、日本語を話せているのか正直わからないのだ。

初めては彼女たちのためにとっておきたかったのだが会ってしまって何も言わずに『さようなら』なんてそれはとっても嫌なことだと思う。私ならそう思う。

身振り手振りで意思表示も期待できるとタカミチは言ってたしそれも並行してやろう。

「はじめまして。私、ユキといいます。私の知人と同じ格好……同じクラス？」

「は？　あ、いやお前の知人がどいつか知らないからよくわかんないんだけど……」

「タカミチは同じクラス？」
「（おいおい、マジで名前呼びじゃねぇか）あぁ、担任だよ。そうなると同じクラスだな」
通じた！　ありがとうタカミチ！　パンと両手を合わせて喜んでいると若干引かれたがめげずに話そう。
タカミチと同じクラスならエヴァと同じクラスでこの人も同じクラス！　なんという運命。学校はいろんな人の集まる場所で沢山クラスがあるって聞いたけど案外狭いものなのだろうか。
「というか日本語うまいな。友達がさ、英語で話してたって言うから喋れないものだと勝手に思ってたけど……」
「タカミチがここの言葉を教えてくれた。私は謝りたい人がいる。多分タカミチのクラスにいる人だと思う」
「へぇ、あの先生がねぇ」
「私はその人達に謝りたい、でも彼女たちには私の言葉は通じない。だけど喋れないと不便。だから学んだ」
「律儀なやつだな。今時そういうの珍しいと思うぜ？」
「そう？　でも私は私のやりたいことをしたいから。もう少し話し相手になってもらってもいい？」

構わないとの了承を得てもうしばらく話しこんだ。

▽

寮に居てもやることがなく仕方なしに出歩くことにした。やることもあるにはあるが今はやる気も起きない。よくある現実逃避だった。

ウィンドウショッピングってのは時間を潰すのにはもってこいだと思う。あれはもともと店員が納得すれば……らしいけど。そうして暇を潰して今日は何を食おうか、ってな具合で飯屋の方面に向かったらそいつは居た。

食品サンプルをかぶりつくように眺める少女。ぱっと見外人のソレ。目が輝いたようにガラスケースにへばりついた姿は実際にみると面白いと思う。ジーンズにシャツとラフな格好だが妙に似合っていてそれでいて妙にその場から浮いていた。

つい目がそいつだけを捉えることになり今まで気付かなかったが、今朝朝倉が言ってたユキと呼ばれる少女だった。

私の漏れた一言を皮切りにそいつと話す。日本語学びたてのやつと話すのなんて希少だな。とかどうでもいいことばかり考える。しかし耳はそいつの話そうとする言葉を逃さないように必死だった。だってよ？　一生懸命通じるように不安そうに話して

いるのに曖昧に返すなんて私にはできない。ここがどんなに非常識な場所だからって理由でも。

突然話しかけられたもんだから素の反応で返しちまったけど特に嫌悪されてないみたいで助かったぜ……。

話を纏めてみるとまた朝倉に良いように情報操作（聞こえは悪いが）されてたみたいだな。あっぶね、危うく騙されるところだったぜ。

つか知人と同じ制服って言ったときエヴァつってたか？　だからあの時マクダウェルも話を聞いてたのか……。

となると高畑は日本語を教えるために一緒にいて、こいつは私のクラスの誰かに謝りたいから教えてもらってるっつーことか？

……もしかしてあの時反応してた桜咲たちに謝りたいってことか？　いや流石に勘ぐりすぎだよな。

「あっ」

「ん？　どうかしたか？」

唐突に驚いたような声を上げて内心驚きつつ何でもないように取り次ぐ。妙に上手だから聞き間違えると余計なこと喋りそうで怖いんだよな、まぁ、こういう会話も新鮮で面白いが。

「私、多分同じクラスになる、だからもし良ければ仲良くしてくれると嬉しい」
「んっ、おう、それくらいなら……」
「ありがとう、また会えるのを楽しみにしとくね」
それだけ言うとあいつは去っていった。……あ、名前聞いたけど答えてないわ。ま、いっか。

きっかけ

▽

「私はお前にそんな顔をしてもらいたかったんじゃない」

咄嗟に出た言葉に驚いた。口から漏れた言葉から逃げるように私はあいつから離れ自室に帰った。逃げたといってもいい。それくらい驚いた。

幸い……といえばいいのか、あいつには聞こえていなかっただろうが。

あいつと最初に戦った時以来、私はあいつを懇意にしていた。興味深かったといってもいい。だからこそチャチャゼロとの遊びも止めなかったし、何度来ても嫌な顔もせず入れさせた。仮契約に至っては深い考えではないにしろ繋がりが欲しいと思ってしまったからだ。今思えば浅はかだったと言ってもいい。

あいつは「竜の心臓」と言っていた。正しくは鼓動だったか、自らの心臓がない事と関係があるのだろうか。そもそもわからないことが多すぎて何を整理すればいいのかよくわからない。一度あいつの記憶でも覗くべきか……？

覚者というのはみんなああなのか？　あいつが持っていた指輪も謎だらけ、その上あ

いつは自分から説明なんてしようともしやしな……いや、そういえば一切聞かなかった私も悪いのだろう。

思考を一区切り終えて振り返れば茶々丸が待機していた。

「マスター、ユキさんから伝言を承りました」

「ん？　あぁ、わかった。なんだって？」

「【少し出かける、飽きたら帰る】だそうです。それと」

「それと？」

「【何か悩んでいるなら言ってくれないとわからない】だそうですよ」

それだけ伝えると茶々丸は部屋から出た。ふっ……そうか、じゃあ……そうさせてもらおうか。

▼

知り合いも増えてホクホクとエヴァの家に戻れば彼女が珍しく出迎えてくれた。少し雰囲気が明るかった気もするが大丈夫と問いても多分本心は語らないだろう。

そしてまたチャチャゼロと遊んだ。弱いくせに気が抜けなくて楽しいんですって。

遊び終えたときエヴァが近くにおらず茶々丸に尋ねてみれば少し出かけているらし

い。私も近場にいたのだから言ってくれればいいのに。
　またもや学園長に呼ばれたので向かう。今度こそ学園のことについて話してもらえるのだろうか。
「学園長、きたよ」
「あぁ、来たかの。今回はエヴァも居らんからやっとこさ話せるのぅ」
　しみじみと言う学園長に、あぁやっぱり疲れてるんですねとか思った私は悪くないと思う。

　深く説明しても私が理解しにくいと思ったのか、はたまた私には必要ではないと思ったからなのか、それはわからないが学園長は掻い摘んで説明してくれた。
　学園というものは子が未来に向けて学ぶ処だと。私にはそれを学生に紛れて手助けして欲しいと。私に経験がないということもわかってくれているのでついでに楽しんで来いと。孫娘も居るから仲良くしてくれとも。
　そう言われた。
「あぁ、それとじゃの」
「まだ何か？」
「近々新しい教師が来るようでの。まだ年齢的に幼いんじゃが一応魔法関係者じゃ」

「教師というのに年齢は関係ない？」
「ちょいとワケアリなのじゃ。やってくれるかの？」
「私一人で救えるヒトなんて限られている。それでも？」
「それでも構わんのじゃよ。あぁ、それと夜間警備に参加してみる気はないかの？」
「構わない。けれどやりたい事がある、それが済んだらやる」
「急がずにゆっくりしてくれて構わんよ。住む場所も確保したからの、これがその場所と鍵じゃ」
「……。ありがとう、それではまた」
「簡単な家具は置いてあるから好きなように過ごすといい。必要なものは置いてある。足りなければ好きに追加しておくれ。ではまたの」
やりたい事なんてひとつしかない。そもそもそのために言葉を学んだのだ。
学園長から手渡された地図と鍵と共に帰路に着く。
帰宅……というのも違和感しか感じないが宛てがわれた部屋はとても質素だった。まるであの世界での私室そのままのようで思わず笑みがこぼれた。
ベッドと棚、それから調理場と器具に掃除道具。その他生活するにあたっての最低限の物。それだけしかないものだからただでさえ広い部屋が尚且つ広く見える。内装はエヴァに相談でもして追加しようか。

思えば割と馴染んでいる自分に吃驚だ。最初は訳も分からず少女を救えば問い詰められてそこを勘違いされてタカミチに拾われて、初日から大変な思いだった。それでいてとても楽しい思い出だった。

新しい環境というのを体験するのはやっぱり楽しい。そんな楽しさをこれから来るであろう先生に共感してもらいたい。それが今の私にできるせめてもの恩返しなのではないだろうか。まぁ、彼らにそんな気はなくもっと別なことを期待しているようにも思えるが……。

そして新しいといえば学園生活。どんなものなんだろうか、タカミチが言うには知識を学びやりたいことを見つける。そういうものだと教えてくれた。そんな場所で私に人の手助けを求めるなんて……こういうのは深く考えるだけ無駄なのだろう。気楽に考えよう。

――そうだな、それがいい。

!?　突然聞こえた声に咄嗟に反応するが誰も居ない。気配もしない。だがこの声は……。

――いい反応だな。顔向きも合っている。流石だな。

「エヴァ、悪ふざけはやめて。心臓に悪い……ないけど」

――……そうするよ。「っと、驚かせたのには謝ろう。すまなかった」

にょきりと私の足元にある影から私のものではない手が生え、エヴァが出てきた。いつの間にか私の影に潜んでいたのか、こちらの魔法の効果か何かわからないが彼女は私の影から現れた。便利なものだなぁと軽く感心する。

「いいよ。貴女にここを教える手間が省けた。それでなんの用？」

「少し聞きたいことができた」

「私が答えられそうなものなら」

「お前が覚者になった出来事。それとついでにパクティオーカードの扱い方だ」

私の事？　そう問われて初めて気付く、そういえばエヴァには言ってなかった。てっきり学園長辺りが言ってくれているものだと安心しきっていた。同じ話をしても彼女にするには浅すぎる。もっと深く話してみよう。覚者のではなく私のお話を。

ちょっと長くなるよ？　と一呼吸入れて話し出す。私の世界の事を。自分の記憶からも擦れ掠れの一番最初の記憶を。彼らには伝えず彼女にだけ伝える私の過去を。

――私の居た場所はとても大きいと言えない程の小さな漁村だった。

平和だった私の村に二人の衛兵が来た。内容は覚えてないけど確か「身に覚えのあるものは首都へ来い」だったかな。私には関係ない事だと聞き流して今日は何をしよう

か、明日は何をしようか。そんなことを考えてた。

だけどあいつは現れた。遠くからでもわかるくらい大きくて遠くからでも聞こえるくらい大きな声でそいつは降り立つ。

橋を壊し、家を壊し、何かを求めて降立った。村は混乱に塗れ、或者は戦い、或者は逃げた。衛兵は逃げた方だったね。

私はそのとき無我夢中だった。なんでそうしたのか今でもちゃんとした答えはわからない。

私は逃げた衛兵の落とした剣を拾って竜の息を超えてその剣を叩きつける。鱗なんて貫通しないから刺さるわけもない、けどもめげずに繰り返す。勝てる筈がない。そんなの関係ない。私はそれを繰り返した。

そして私は竜に払い除けられて吹き飛ばされる。何度も地面に叩きつけられて痛みで気が飛ぶがそれ以上に痛んで苦しんだ。だけど私は笑ってた。吹き飛ばされる直前に決死の覚悟で構えた剣があいつの手に刺さったから。その程度だけど私は満足気に呟いた。ざまあみろって。

それをね、あいつは笑ったんだ。面白いものを見つけた、新しい玩具を見つけた子供のように。そうして口を開く。いや頭に響いたんだったか。

「お前こそ、選ばれた者だ」

何か呟いて器用にも私の胸に爪をあて私の心臓を引き抜く。鈍い痛みが私を襲い、意識なんて留められる訳が無い。私はそこで気を失った。私、死ぬんだ……。そう思わずにはいられなかったけどね。

でも目が覚めた。今まであったことなんて全部悪い夢だったんだ、そう思おうとしたけどそれは無理だった。周りを見れば傷ついた人がたくさんいた、痛みに体を反らして唸って。

竜の事を思い出せば胸が痛み光った。何もないその場所を示すかのように強く。

「私を倒せ」

もう何度言われたかも忘れるくらいその言葉を言われた。奪われた心臓を取り返す為に――

私の長い説明に視線を逸らさず彼女は聞き入っていた。

「それでお前には心臓がないのか？」

「そう。だけど違う。これは繰り返す始まりの話」

「始まり？」

首を傾げる彼女は尤もだと思う。私だってそうだったから。

それが心臓を取り返しても何度も続くなんて思うわけがないじゃないか。
一度目は世界の王になり、二度目は世界の王を諦め、三度目は逃げ、そして……。
二の句を告げようと口を開こうとしたらエヴァに人差し指で唇を抑えられた。
「いや待て、今はいい。今度じっくり聞かせろ。今全部言われても整理がつかん」
「それもそうだ。んー……あとカードの使い方、だったか」
「何も言わずに使ってみても面白いとは思うんだがもしもの時のためだ。使い方は知っておいて損などない」
いいかよく聞けよ？　そう前置きをして話し出す。念話（テレパシー）のやり方、パートナーの召喚（つまりは一方通行）、簡潔ではあったが試し試しだったのでわかりやすくて助かった。私もマスターって呼んだほうがいい？　とか冗談で言ったら好きにしろと言われた。時と場合ってやつね、了解。
「今度家具とか買いたいんだけど一緒に来ない？　そもそも場所よくわからないから茶々丸を借りてもいい？」
「ふんっ……いいだろう」
にんまり笑う彼女は板についてるというか見た目相応で可笑しくて私も笑ってしまう。
電子機器に関しては茶々丸によく聞くにしてもせめて生活感は欲しいよなぁ……。

▽

何年越しの懺悔か……そう思わせる程の状態で口開かれた内容は言葉では浅く、感情では深く聞いてるだけのこちらを動揺させるには十分だった。表情に出るほどではないにしろ驚いた。こいつが言霊を使えたら相当の力になるんじゃないかと思える程には。

ジジイ達にも同じことをしたのかと聞いてみればもっと浅く説明したらしい。覚者とわかるように軽くだったらしいから相当浅いのだろう。長く生きれば生きるほど説明する量も増えるから面倒だ、あいつがそう言ってがぼやくのも尤もだった。

覚者……ただ竜の遊びの一環でなっているのだと思っていたがなかなかに深そうだ。

あいつの影に潜っている間にイイ情報が得られた。

まずは『幼い先生』だな、私に言うよりも先にあいつに伝えたということは私には知られたくない内容だったようだし……帰ったら茶々丸に探らせるか。

それとあいつは人目を避ける癖があるらしい。私の家からジジイのいるところまで人気(ひとけ)があったのにも関わらず一切遭わなかった。人払いの術式だと不信に思う奴もいるだろうがあれは長年の技術故、それを普通だと思わせるくらい日常的にやっているよ

うだった。

あのクラスに来るのにあんな調子じゃ早々に目をつけられるぞ……。

何があるのかわからないにしろ力を溜め込むいい理由にはなった。新しい従者もできたことだし……な。

初めてのクラス

▼

季節というものは肌で感じるとてもいいものだ。あれよこれよと準備をしていたらいつの間にか学校に行く時期になった。軽く説明を学園長から聞き、魔法のことと覚者のことは厳密に扱うようにと伝えられた。元より声を大にしてまで言うつもりもないので勿論だと答えた。それとタカミチの名前に先生を付けるようにと。

タカミチ……先生のクラスになる私は学園長室からタカミチ……先生と一緒にそこへ向かう。うん、言いにくい。一応学生になるから先生呼びになるのは構わないんだけど呼びなれた名前に先生を付けるのに抵抗というか違和感というか、そういうのを感じた。

がやがやと壁越しではあるが人一倍うるさい教室の前でタカミチが止まった。

「ユキ君、この先が君の通うクラスだよ。覚えたかい？」

「少し不安がある。けど大丈夫」

「そうだね、すぐに慣れるよ。僕が先に入るから呼んだら来てくれるかな？」

頷く事で肯定する。年甲斐もなく緊張する。一応タカミチ、先生もエヴァも茶々丸もいる。それとあの時話して名前を聞き忘れた人も。だから不安はないけども。

タカミチ先生が教室に入れば多少は静かになり、私が呼ばれる頃にはうるさかったのが嘘のような静けさになっていた。嵐の前の静けさというかとりあえず私だったら進んで入りたくない。しかし呼ばれたからには行かねば。

ガラリ、横開きの扉を開けてスタスタと歩き出す。タカミチ先生の近くまで行ってから横を向く。エヴァがにんまりと笑い、あの時の二人はじっとこちらを見ていた。私が口を開くのを待っているのだろうか、タカミチ先生も和やかにこちらを見ているだけで助けてはくれないようだ。ふぅ……覚悟を決めて喋ろうか。

「ユキと言います。日本を学びたく叔父であるタカミチに連れられて来ました。よろしくお願いします」

学園長から伝えられた設定を思い出しながら自己紹介をする。苗字というものを考えるときにこうしろって事になった時は必要性を感じなかったけど、今になって思えば説明が楽で良かった。困ったらタカミチ先生に丸投げできるし。

そう思っていたっていいじゃないか、頑張って日本語を勉強したんだから少しくらい楽したっていいじゃないか。

軽い自己紹介の後に案内された座席に座って、その座席はエヴァの近くで嬉しくて、学生ってどんなことするんだろうか、楽しみだなぁって思いを馳せていたら噴火したように騒がしくなった。

三人以上から同時に声をかけられたからなんて言ってるか理解できなくてひぃひぃしてて、助けを求めるようにタカミチを見れば軽くため息を吐いていて……とても、とても、疲れた。先程エヴァが笑っていたのもきっとこうなるのを予期していたのだろう、相手の思惑に気付かなかった私が悪い。

途中、チャオと名乗った少女からは言い知れぬ違和感を感じた。話している内容からは好意的だが私を値踏みしているような……まぁ、何も言われてないし大丈夫だろう。その後も何度か見られていたが悪意もないので問題はなさそう。

あとはアスナ……と言ったか、その少女になぜか怒られた。確か「タカミチとの関係は?」とかそんな内容の話をしている時か、私の答えは「家族のような関係」だったか、何が彼女の琴線に触れたのだろうか?

その時にアヤカというクラスをまとめている少女が取り持ってくれたので大事には至らなかったがあの少女の怒り様は怖かった。

カズミという少女からは質問攻めに遭った。とりあえず早口で捲し立てられたのであんまり答えられなくて申し訳なかった。速筆で私の答えを書いてる様は凄まじいも

のだと思ったけども。

あの時私と話してくれた少女はチサメというらしい。あのあと名乗ったのに名乗り忘れたのを悔やんでいたようで私としても嬉しい限りだった。自分勝手に言うだけ言って帰った私にそう思ってくれるだけで彼女の優しさが滲み出る。

でも教室に幽霊が居るのには驚いた。周りからは見えていないようなので（制服も違うし）話しかけなかったのは悪いことをしたな……なんて思ったけどみんなに囲まれていたからあの状況だとどの道話しかけるのは困難だったと思う。今度機会があれば話してみようと思う。悪い子じゃなさそうだったし。

とりあえず……疲れた。ちゃんと話では聞いていたけど実際に中に入るのでは全く労力が違う。タカミチは助けてくれなかったし……エヴァは言わずもがな、茶々丸は助けてくれそうだったけど止められてたみたいだし……頼れる人なんていなかった……。まぁ、アヤカという少女が困っていたら助けようと思ったが。

でもあの少女たちの名前がわかっただけでも良かったかな。

▽

少し前に彼女がここに来ることを知った。調べたわけではなく茶々丸のメンテナン

スの時にだったカ。その言葉で出てくる彼女は物語の人物のようで信じられなクテ、でもそんな世界があるんだと思いたい私もいて、今日この時彼女を見てそう思っていて良かったと、そう思えタ。

それからというもの私は彼女のことを追いかけた。勿論視線だけデ。彼女はそんな私の視線に勘付いているのかその時だけこちらを見て首をかしげる。決して悪意があるわけではないのでその警戒もすぐにやめるのだけどネ。

彼女の事はあまり知られたくないようで茶々丸に聞いてもあまりいい答えは聞けなかっタ。エヴァンジェリンは笑って「悪い奴じゃない」の一点張りだったヨ。サーチャーで追おうにも彼女の察知能力の方が高くすぐに撃墜されたネ。三回目にしてすぐに諦める程だったネ。

一応計画に支障を及ぼす程の影響ががあるわけではないが、その時までの暇つぶしにはなる。そう思っていたガ……なかなかに面白い。古やかえでサンのような足運びで歩く姿は歴戦の戦士のソレで、明日菜サン達と話している時は年相応の少女のソレで、高畑先生と話している時は懐いているペットのソレ。全てがちぐはぐな彼女は見ていて面白いネ。それを狙ってやっているんだとしたら私すら騙せるほどの技量ダヨ。

まだわからない事だらけだが今はエヴァンジェリンの言葉を信じておこうかナ。

嵐のあとに

▼

それから時が経つのも早く……という言葉で済ませないようなくらい彼女たちと一緒にいるのは辛かった。このクラスは毎日予想外の事が起き続ける。そう思える程に目まぐるしいのだ。私が入ってから暫くは私を中心とした事件が起きた。どうあがいても巻き込まれるのには正直に言って勘弁して欲しい。ただでさえクラスメイトたちの名前を必死に覚えようとしているのに――だ。（フウカがクラスメイトの名前は覚えるものだと教えてくれたし）

どんな事件があったのかといえば私の住居のことに始まり、茶々丸を連れて買い歩く予定だった家具集めを無理やり手伝ってくれたり、私の部屋で小さなパーティが開かれたり（よくあの人数が入ったなぁとか思ってたり）した。事件というより彼女たちからすれば一種の歓迎だったようで嬉しくもあったが。それは騒がしく険しいものだった。

ある程度言葉を学んだとはいえ私の教科書は未だ英語表記で、ペーパーテストすらも一部英語表記にしてもらっている。楽ができて嬉しいのだが答え合わせ的な集まりに入れないのが少し悲しい。完璧に覚えるまでもう少しタカミチに教えてもらおうか。

でもあることが原因で少し懸念しているのもあったりする。

そしてその原因というのはあの二人に無視されていることだ。謝りたいと思っているあの二人に。時間が合わないのならその時まで待つのだがそうではなく徹底的に拒絶されているようにしか思えない。

どうせなら二人同時に謝りたいから二人が一緒にいるときに謝りたいのだが何かと理由をつけてマナが離れる、そしてセツナが残り彼女が一人では用事があるといって離れるのだ。……まだ思うように言葉が出ない私が悪いのもあるのだろうが、呼び止める暇もなく彼女たちが離れてしまう。

気落ちしている私にエヴァは面倒だから嫌だと助けてくれないし、茶々丸に言ってみたが主人から傍観しろとか言われたみたいで無理だった。

何のために言葉を覚えたのか少し疑念が湧いてしまう。今はいろいろやりたいことができたし恩返しもできるから大事だと思う。けどやっぱり謝れないのは辛い。

はぁ……と今日何度目かわからないため息を溢す。どうしたらいいんだろうか。

「なんだ、悩み事か？」

唐突にかけられた言葉にはっとして顔を向ければそこにはチサメが居た。

「なんだその意外そうな顔。ま、私としても会おうと思って歩いてたわけじゃないしな、意外なことに出くわしたのは同じだけどさ。で、なにか悩み事か？」

「そう。謝りたい人達に謝れないの。エヴァ達に相談したけど助けてくれなくて……」
そう答えればチサメは気だるそうに頭を掻いた。やっぱりこの手の相談事は面倒なのだろうか……。やっぱり何でもない、ごめんなさいとだけ伝えて去ろうとすれば彼女は引き止めるように私の肩を掴む。
「あーもう！　そうじゃねぇよ。手伝ってやる。話を聞いてはいそうですか、で突き放すほど私は落ちぶれちゃいねぇよ」
「……本当に？」
「それに口約束だけど仲良くするって言っちまったしな。私に手伝えそうならやるよ。いや違うな、私がそうやりたいって思った、手伝ってくれるよな？」
やはり面倒そうな仕草をしたけれど彼女はそう言ってくれた。あの時私が言ったことに意趣返しするように言った彼女の顔はとても華やかだった。
そう言われたら私の答えなんて決まっているようなものじゃないか。

やりたいこと

▽

事前に知っていたとは言え本当に来るとは思わなかった。高畑を名前呼びしている理由も一緒の苗字だったからしく一人納得した。クラスに来た時に少し話してみたがユキ（そう呼んでくれと頼まれた）はやっとやりたいことが出来るって喜んでいた。その時に私も自己紹介をした、あの時に言い忘れて少し落ち込んだのもあって少し声を大きくしちまって朝倉が目を光らせていたから後でどんな目にあっちまうか考えるだけで嫌になる。

あいつの頑張りが成就して欲しいと切に願うのは一度関わってしまったからだろうか。でもやっぱりすぐにそれが叶う事はないようだった。

あの時に言っていた「人達」っていうのはやっぱり桜咲たちの事を言っていた様であいつらと何があったのか一切わからないがあいつら尋常じゃないくらいにユキを避けている。何度か教室で話そうと試みているあいつを見るが何かと理由を付けて逃げるのだ。その度にあいつが落ち込むのを見て嫌気が差す。あいつの頑張りを知らないで

そんな行動で示すのは見ていて嫌だった。

だからこそ私は珍しくいつもの傍観をやめて行動に出ることにした。知り合いだって言っていたマクダウェルは最初の行動でわかったが、絶対にからかうだろうから手伝わないだろうし、高畑に相談するほどあいつは器用じゃなさそうだしな。そう思って探し歩けばすぐにあいつは見つかった。想像通りで嫌だったが疲れたようにため息を吐くあいつを見付けすぐに声をかける。落ち込みすぎて私がいることすらも気付けていなかったようで心底驚いたような顔をするこいつを見て内心笑ってしまう。探していたって面と向かって言うのは少し癪なので軽い嘘を言うが言ってから思い出す。こいつにそういう態度はダメだ、疑うことを知ら無さ過ぎて全て本音に捉える。言っちまったことを捻じ曲げるわけにもいかずにとりあえず概ね知っているが問い質す。そうして返ってきた言葉にやっぱりかと思わず癖の一種になってしまった動作をしてしまう。やってからハッとなるがその私の動作であいつはまた落ち込んでここから去ろうとしまうがそうはいかせない。何のためにお前を探してたと思ってんだ！　ユキの肩を掴み思いを伝えてみれば消え去りそうな声で「本当に？」とか聞いてきやがる。お節介だと言われたとしても一言マクダウェルに何か文句言ってやりたくなる。多分だがこいつは頼られるのに慣れきってるせいで頼ることに慣れてねぇ。そんな奴をからかうのは本当にその事態を軽く見ているか嫌いな奴だからだ、マクダウェルはその前者だろう

から事の大事さを知ら無さ過ぎる。ユキの性格を今のところ理解できてるのは私だけなのか？　それともやっぱりココ（麻帆良）だからなのかはわからないがそう思わないと気がすまない。

しかもそう問い返すってことは私も信用されてないってことになる。それも今まで誰もこいつを助けてやらなかったからだろう。だからこそ私はあいつの言っていた言葉で言い聞かすことにした。普通の言葉で取り繕うよりも自分が言った言葉で返された方が簡単だろうしな。思い描いた通りに事が運んで笑みを深くするが……さてどうやって橋渡しをさせようか。

話を聞いてみれば些細なことだった。不器用にも程があんだろ……。「二人に謝りたい」のは知っていたが、「同時に謝りたい」のは流石に予想外だった。なんでも後に謝った方に悪いんだと。気持ちは同じくらいなんだからそう思うのは可笑しいと思うんだ、頭が固いというか何というか……まぁそう思うのは悪くないんだが行き過ぎるとこう

なっちまうのか……。

龍宮のヤツは今のところキツそうだが桜咲の方は一応いけそうだな、ただこいつが龍宮の方に感けている間に離れるだけらしいからそっちから行けばいい。そうして桜咲を味方というか巻き込んで龍宮の逃げ場をなくせばいい。謝りたい気持ちは同じなんだから後先の優劣なんてあるわけないんだ。そう言ってみればユキはまた驚いたように「あっ」と声を漏らす。だけどやっぱりそれも不安なのだろう、すぐに表情が暗くなる。思わず舌打ちしたくなるがそうはいかない、流石に同じ轍は踏まない。

「私が付いて行くから安心して謝れ、つか絶対謝れ、逃がすな、追ってでもお前の気持ちを伝えろ。そうすれば悪いことにはならねぇから」

そう言ってやればあいつは渋々だが頷いた。「嫌われない?」とか気にしていたがそう思うのは可笑しいだろ、お前を嫌う前に私だったら避けてる自分を嫌うね。

龍宮が逃げるとなると部屋に駆け込んでも辛そうだな、桜咲は呼べば来るだろ、あいつそこんところ義理堅そうだしすっぽかすにも予定がないとやらなさそうだしな。呼ぶのは私がやるか?　普段話さない私が大事な用事だって言えば警戒はするだろうが絶対に来そうだな。下手にこいつが誘うよりもいい効果だろう。

「日程とかは私が決めてやるよ。悪い日とかないだろ?」

「特にない。頼りきりでごめんなさい」

「へっ、気にすんな。……友達だろ？」

普段言わないくさい台詞をさらっと言える自分に驚くが悪い気分ではなかった。こいつも私のその言葉に驚きつつ間髪入れずに「うん！」と答えてくれやがる。こういうのも悪くないな……。

さてと、行動するのは早いうちが良い、明日からすぐにでも行動するか？

労苦

▽

結局ここまで仕込んでおいて聞きそびれた事がある。なんでユキがあいつらに謝りたいのかだ。

でもあいつに聞いたところで全力後ろ向きの言葉が返ってきそうだ。まぁ何かと秘密というか機密というかそういうものを多分に含んでいるようでうまく伝えられないようだから詳しくは聞こうとなんて思わない、けど簡単な経緯というか大筋は聞きたかった。ユキが不器用なのは分かっているつもりだから事が終わってから桜咲たちに聞いてみよう。あいつらならそういう説明もうまそうだし。

やることは簡単。ユキのやつに書かせた手紙を桜咲の下駄箱に入れる。手紙の内容はちゃんと私も確認した。字面は悪いが読めなくはない。覚えたてにしては綺麗な位だ。文字の間違いもあったがそのままの方が誰が出したかわかりやすいだろうし残しておく。伝えたい意味もわかるだろうし。

意気揚々と下準備したものをもって学校に向かう。それもまだ桜咲が寮にいる時間を狙って早々に。

こういうことは口頭で説明するより文字で表したほうが効果があると思うんだ。桜咲辺りには特に。一応下駄箱を確認して靴がないこと、名前が合っているかを確認。間違わないようにそこに入れ――ようとして朝倉と鉢合った。

なんでこの時間に居るんだよ?! そう思わずに居られなかった。私が珍しく行動に出たからこうなったってのか!?

そして私の現状と事の重大さに気付く。これじゃラブレターを桜咲に出そうとしているようにしか見えねぇ、誤魔化そうにも面白可笑しく記事にされるに違いない。やめるなんて選択肢は私にある訳もなく、どうやってこの場を乗り切るか考慮していたが朝倉は私の横を過ぎ去っていった。「仲直り頑張ってね」という短い言葉と共に。

昨日のあれを見られていたことに驚愕したいが、あいつが素直に応援するのも珍しいと思う。平常のときでもあんな行動を多少なりとも表してくれれば信用するんだけどな……。

というかなんでこんな時間に来てるんだあいつ?

そう思わずにいられなかったが今はこの手紙を突っ込むことにしよう。そうして休み時間にでもユキに言ってやって少しずつ地盤を固めて目的達成していこう。

自分から行動するのが嫌だったが案外こういう事が出来ないって訳じゃなくて助かったぜ。大見栄張っといて「出来ませんでした」じゃ面目ねぇってレベルじゃねぇ。

さて気付かれないように後は、っと――
「そこで何をしているんですか？」
「うえぇぃ!?」
　唐突に話しかけられて普段出さないような声を上げて振り返ってみれば件の桜咲がいた。視線で手紙をみれば突っ込んだ後だったので問題ないように取り繕ってこの場は逃げるに限る。
「あぁ、いや、他の靴箱も中身同じなのかなって思ってよ、ちょっと物色してただけなんだわ」
「……こんな時間に？」
「き、気になったら寝れなくってねぇ。人が来る前に確かめたかったんだ」
「……そうですか」
　我ながら阿呆みたいな言い訳だと思ったがこの時ばかりは麻帆良様様だと思ったぜ。警戒はまだされているがいつもの教室でするような感じに戻った。やることも終えたのでさっくりそこから逃げ出す。悪いことなんてしてるつもりはないんだがその表現しかできない。警戒するのはわかるが、とりあえず竹刀袋に手をかけるのは勘弁してくれ……。

叶う？

▼

「ごめんなさい」

「……」

私は時代錯誤が酷いようなので謝り方をタカミチに聞いた。私の知っている方法でもいいのかも聞いた。それで問題はないと言ってくれた。けど私は心配だった。チサメにずっと任せっぱなしは嫌だから、待っている間に私は私のできることをやっていようと心に決めた。

だから別の人にも訪ねた。茶々丸に、チャチャゼロに、エヴァに、学園長に、クラスメイトにはまだ聞いてないけど……。

エヴァは今忙しいらしく茶々丸もそれに伴い軽くしか話せなかったが一応答えは得た。

それでもやっぱりみんな、私の考え方は不器用だって言う。私も言われてからそう思った。優劣なんてないんだって。でもその気持ちは大事だって言ってくれた。

タカミチは私のことを心配してくれて「僕に出来ることがあったら手伝うよ」と言ってくれたが男性に頼ったこともなく適当にはぐらかしてしまった……今更ながらこどもの意地っぽくて泣きそうになる。

でも、そうやって得ただからこそ私は私の行動を大切にしたい。

「――ッテ言ウケドヨ、流石ニズット縛ラレルノハ面倒ダゼ」

「……ごめんなさい」

「暇ナノハ認メルガ、コウイウノハアンマリ教エテヤレネー。ソレデモイインダナ？」

「構わない。今度何かしらで返す」

呆れたように言うチャチャゼロは尤もだと思う。ずっと相手してくれたもんね、相手役頼んで本当にごめん。

「礼ハイラネェ……逆ニ遊ンデクレタ礼ダ、コレクライナラ任セロ」

「……ありがとう」

「土下座モイイケドアンマリヤンナヨ？　ヤリ過ギハ安クナル」

相手役ありがとうございます……。

――――――――

「場所ニヨッチャ土下座出来ネェカラ腰曲ゲルダケデイイナ」
「わかった」
「曲ゲ具合ハ最敬礼デイイダロ」
「このくらい？」
「ソレダト下ゲスギダ」
「……これくらい？」
「ソノクライダナ。マァ後ハ千雨ッテヤツ待チデイイダロ。当タッテ砕ケテコイ」
「ありがとうございました」
「オウ！」

時計を見ればチサメが約束してくれた時間より少し早い程度だった。割と余裕を持って練習したつもりだったのだが思いのほか白熱していたらしい。練習してやるものではないけれど手持ち無沙汰というか先も言ったが何もしないで待つのは性に合わない。あとは待ち合わせた場所に待機すればいいんだったか……。うまくいってくれればいいのだけど……。

待ち合わせ場所に向かってみれば満身創痍なチサメが迎えてくれた。見るからに疲

れた表情をしていた彼女に何かあったのか訪ねようとも思わない、彼女はきっと言葉では言い表せないくらい凄いことを成し遂げたんだと思う。私のことを友達だと言ってくれた彼女に私は何を返せばその行動に返せるのだろうと今から悩まなければいけなさそうだ。

そう思っていたがお返しは私の用事が完了すればいいらしい……彼女は私に何を望んでいるのだろう……今の気持ちを表すならば彼女の願いを世界を敵に回してでも叶えることくらいなら造作もない。そのくらい衝撃的なことを言われた。

当たって砕けてこいと言われたので自信がなくともやることはやろう。

その合流したチサメから「間違ってたぞ」と言われるまで字を間違ってることに気付かなかった私はもう砕け散った気分だったが。

▽

確かに気になったら知りたくなるけど……。

私の下駄箱で何かをやっていた長谷川さんは颯爽と去っていく。しどろもどろで意味はよくわからなかったけどなんだったんだろうか……。とりあえずあまり親しいとも言えないので靴を仕舞おうとして違和感に気づいた。——何か入ってる？

手に持っていた靴を下ろして下駄箱を覗き込む……手紙？　なんで下駄箱なんかに……？　警戒しつつ靴と手紙を入れ替えるようにしまって手紙を見る。私宛なのは書いているが誰から来たのかわからない……私宛なのだから中身をみてもいいのだろうが……というよりこれは長谷川さんが入れたのか？　それとも確認した時にこれを見つけたからあの態度だったのか？

とりあえず立ち往生していても邪魔なので鞄に入れて教室に向かう。中身は休み時間にでも確認しようか。

休み時間に入り手紙の中を確認すべく教室から離れる。あの教室の人たちに見つかれば大事にされかねないので警戒しつつ開く。文面は少なく一文だけだった。

「放課後、屋上にて持つ」

鉛筆で書かれているその文字は何度も消された跡があった。慣れないながらも必死に書いたことが伝わるほどに。字を間違っているけれど気にならないほどに真剣に書かれていた。概ね彼女が書いたのだろう。私の勘だが間違ってはいないと思う。中身を見た手紙をポケットに入れ教室に戻る。

高畑さんか……それにしても高畑さんの編入には驚いた。一応学園長から直に聞いていたけれど英語交じりという訳もなく住むのに不自由はなさそうだ。……不審な点は大いにあるけれど。例えば授業中や休み時間の時に視線を感じ警戒すれば彼女が見

ていることが多い。私がそれに気づいて首を傾げればはっとなって視線は消える。
私と龍宮が一緒に行動しているときに話しかけてくれるのだが言葉尻を濁されて何を伝えたいのかよくわからない。そうすると高確率で龍宮が離れてしまう。私としては初見にあんなことをしてしまったので顔を合わせ辛く、しかし非はこちらにあるので彼女の言葉を聞こうとするがお嬢様の護衛もあるので幾らか経ってから心苦しいが離れる。それは何かを伝えようとしている人に対して失礼だとわかっているけれど私の一番はお嬢様の護衛だ、心苦しいがそうしてしまう。
最初、彼女が伝えようとしているのは龍宮相手にだと思っていたのだがそれも違うようで私にも用があったらしい。でなければ手紙なんて出す訳もない。きっと初めて会った時の事を言いたいのだろう。私としてもあれは酷いことをしたものだ。後悔先に立たずとはよく言ったものだった。弱気になるが手紙まで出してくれて行かないわけにはいかない。
そうして放課後に向かってみれば高畑さんと長谷川さんが屋上にいた。高畑さんの顔色は青く、長谷川さんは教室で見かけるように面倒そうな顔だった。
「あの……その」
吃るように話す高畑さんの背中を長谷川さんがゆっくり撫でる。励ますように「伝えたいんだろう?」と声をかける姿を見て、いつの間にそんなに仲良くなったのだろうか

と感心する。

そして高畑さんは呼吸を整えると思いっきり頭を下げた。最敬礼よりも深く下げられた頭に思わず後退る。なぜ彼女が頭を下げるんだろうか。

「あ、あのっ！　あの時は迷惑をかけてごめんなさい」

「……？　なぜ高畑さんが謝るのでしょうか、貴女に非はないはずですが……？」

「警戒させたこと、謝りたかった。タカミチにも言われた、謝りたいと願って言葉学んだ。どうしても……伝えたかった」

頭を下げていて顔は見えないが後半は泣き声になっていた。長谷川さんの「すまん。少し待っててくれ」との声で高畑さんは出口に連れられて行き、しばらくして長谷川さんだけが戻ってきた。

戻ってきた彼女から高畑さんの事を聞く。

「――って事なんだよ。詳しくは聞いてないんだが桜咲たちに謝りたいんだってずっと言ってたんだ」

「……たち？」

「お前と龍宮だよ。ずっと謝りたいって悩んでんだ。で、私はその協力者っつーか……まぁ迷惑だと思うが受け取ってやってくれや」

面倒そうに言うが表情は真剣だった。てっきり非難されると思っていたがその逆で、

逃げていた私はとても酷い事をしていたと思い知らされた。迷惑だと思う？　そんなこと思うわけない。

「高畑さんは今どちらに？」

「ん？　何するんだ？」

「謝ってきます。それと間違いを正しに」

「間違い？」

「……彼女が謝る必要はないんです。例えそれが彼女のやりたいことだったとしても彼女は一切悪くない」

悪いのは私で、龍宮もそれを勘違いして、そうして彼女が泣いた。それはおかしいんだと伝えなければいけない。

「終わったら聞いてもいいか？　詳しくじゃなくていいからさ」

「……わかりました」

「今頃は自宅だろうよ。これ、地図な……じゃ、あいつのこと頼んだ」

「はい！」

渡された地図を確認し足早に向かう。裏面を見てみれば長谷川さんの字だろうか、【ついでに、もう一人も連れて行ってくれ】と書かれていた。なるほど、確かに。

今の時間なら彼女は部活だろうか……あまり遅くなっても高畑さんに悪いから早く

行かねば。

不安

▽

今我がクラスで大いに賑わっているのは新しいクラスメイトのゆっきーの話題、謎が謎を呼び「先生の隠し子」だの「実は先生のめおと」など高畑先生関連の尾ひれが付いているがこの際どうだっていい。普段は我関せずを地でいっているちうちゃんが珍しくゆっきーにはお節介を焼いているようだし、関心は尽きない。

一応前に英語を喋っているのを聞いたからそっちの言葉で軽い質問を考えていたけどこっちの言葉も喋れるのには驚いた。軽い質問を早口で自己紹介の時にしたけど割と返してくれたし、情報を聞き出すのは楽そうでよかったよ。でもやっぱり馴染みのない言葉もあるのかよく首を傾げていたっけ。

普段の行動をカメラに写すべくゆっきーを追ってみれば酷く落ち込んだ様子だった。もう世界の終わりーのような顔で。それでも泣いていないのはゆっきーは強い子なんだって思えるほどだけどそれは関心できない。そうなっているってことはうちのクラスに馴染めていないって表れで、あの賑やかなクラスで一人落ち込んでいるのは酷なこ

とだから。

流石の私でもあれに踏み込むのは容易ではなかったね。うちのクラスでイジメみたいなことはされてないはずだし、私の問答でああなったようにも思えない。記事にできることじゃないけどとても気になるのは私の性分か、意を決して踏み込もうと足を踏み出すがそれよりも早く現れた人影に私は回れ右をした。即座に木の陰に隠れて様子を伺う。現れた人影はちうちゃんだった。私に気付く様子もなかったのでこのまま隠れて見ておこう。ちうちゃんで無理なら私が行く。頑張れ！　とか心の中でエールを送りつつ。

話し声が充分に聞こえなかったけど内容としては仲直りって事かな？　それも相手はたつみーと桜咲さん。うちのクラスに来る前に知り合っていたことにも驚いたけどあの二人と喧嘩（？）をしたことに驚きだった。二人のことは知ってることのほうが少ないけどそこまで悪い人とも思えない。けどゆっきーの落ち込み様も無視できるほどのものでもない。でも私が分かることと言えば彼女たちは全員不器用そうなことか、ゆっきーとは知り合って間もないけれど型にはまった行動を取る傾向（慣れない地だからしょうがないけど）にあるし、桜咲さんは言わずもがな、たつみーの方は妙に大人っぽくて口数も多くないから勘違いからの行き違いが多かったりする。そういう態度だとゆっきーは勘違いしてああなってるんだろう……。

これで恋バナとかなら喜んで突っ込むんだけどそういう内容ならやっぱりやめとこう。ここは私よりもちうちゃんに任せたほうが良さそうだ。二人の様子を盗み見てとりあえずそこから離れる事にした。今の状態のちうちゃんに見つかったら恐いし。

何をするかわからないけど極力手伝いたいなぁ……。

そうして離れた私は早速情報を求めた。言わずもがな行動力は取り柄だったので早速行動することにする。

とは言ってもあの二人のガードは硬いしちうちゃん側に聞くのもこんがらがっちゃう……クラスに話題も出てないから目撃者がいるとは思えない。おや、早速積んでる？　でも当てはあるんだよねぇ、暇そうなら無理やりとはいけないにしても話してみよう。

という訳で私が来たのは職員室。一応居ることを確認してから入っていく。高畑って苗字なんだから関係者だよね！

高畑先生に話したいことがあると言って別室に連れてってもらってから話し出す。

「最近、ゆっきーの調子が悪いんですけど何か知りませんかね？」

「ゆっきー……？　あぁユキ君の事か。彼女の口から何か聞いたのかい？　それとも記事にでもするために？」

「いや、流石の私でもそれはしませんって……これ置いときますから」

記事にする云々と言われた時に死の眼鏡（デスメガネ）の顔をしたけどまったくもってその気はなかったので首と手を思いっきり横に振って誤解を正す。メモ用紙その他もろもろを机の上に置き記事にしないことを誓う。

「ゆっきーが落ち込んでること先生は知ってますか？」

「……知っているよ。僕も多少なりとも関わっている。彼女がこちらの言葉を覚えたことの理由でもあることだよ」

「今日の放課後、落ち込んでいるのを見て……その時に直接聞こうと思ったんですけど先越されたというか出るに出られなくって……」

「つまり誰かは知っていて、君は知らないって事かい？　内容は知っているのかな？」

「……私が知っているのは仲直りしたいってことくらいしか」

「詳しくは言えない。……けれどそうだね、もしも悪い方向に行ってしまった時に内容を知っている子が他にいてもいいかもしれないね」

そう前置きしてから高畑先生は話してくれた。なんで喧嘩したか、っていう説明は聞けなかったけど。簡単に言えばこうだった、ゆっきーは二人に悪いことをしたと思っているけれど、二人は悪いことをしたのは自分だと思っている。

だからこその行き違いで顔が合わせにくくてあぁなったらしい。

聞けば聞くほどどうしてそこまで避けるのだろうか……そう思っていると先生は続

けて話す。
「そんなユキ君に一度だけ手伝いを申し出たんだけど断られてね」
「え？」
「あの時はユキ君なら大丈夫だと思ってしまったのだけれど……そうだね。もしも僕から見てダメだと判断したらこちらで処理するよ」
それで一応先生との会話は終わった。それ以降は先生が学園長に呼ばれてしまったから流石に呼び止められなかったからだけど。
結局今の私にできることなんてなかったわけだ。いや、先生に事の重大性を伝えただけでもよかったと言えるかな？
意気込んで飛び出してみればあんまり助力できなかった……。やっぱりちうちゃんと一緒にあそこで話しかけとくんだったと後悔するがあの時出なかった私が悪い。
……でもやっぱり協力したいなぁ。ゆっきーに会いに行ってみようかな……。

▽

「よろしかったのでしょうか……」
「んー、なにがだ？」

試験管の中身を混ぜ合わせている途中で茶々丸がそんなことを呟き始めた。試験管に注意しつつも視線を動かす。
「ユキさんの事ですよ」
「構わんだろうさ、あいつは深く考えすぎなんだ。本当にわからなくて泣きついてきたら考えるさ」
「……そうでしょうか」
諦めがつかないように言葉尻が小さくなっているが今はこれをある程度完成させるのが先決だと思うんだがな……。というかマスターが大丈夫だって言ってるんだからそれでいいだろうに。
混ざり終えた試験管をひとまず置いて茶々丸の方を向く。口だけ動かしているようなら文句の一つでも言ってやろうかと思ったが作業は滞りなくやっていた。肩透かしをくらった気分だが今はいい。
「それにチャチャゼロには懇切丁寧に相談したようだからな。問題ないだろうさ」
たった一回予定が合わなかっただけであいつに相談したんだから大丈夫だろうよ。そういうが未だ茶々丸は気落ちしていた。「あの時やはり相談にのっておくべきでした」とか言ってるが流石に心配しすぎだろう。
「わかったわかった……これが終わり次第念話を入れる。それでいいだろう？」

「そういうことなら……」

なんで私が妥協してやらねばならん……。面倒な従者を雇ってしまったか。と後悔するがしてしまった事だ、しょうがない。

話は終わりだと言わんばかりに止めていた作業を再開する。

というか何故私が妥協してやらねばならんのだ！　ふざけてるのか！

内心腹立たしくなりつつも私自身気になってるから念話はする……チャチャゼロは「問題ない」と言ったから気にしていなかったがまぁいいだろう。

だが出ない。作業を終え連絡してもうんともすんとも言わない。いや微かに呼吸音は聞こえるから寝ているのだろう。

寝ているのをわざわざ起こしてまで伝えることでもないか。茶々丸には適当にはぐらかすとしよう。

ハカナイユメ

夢を見た。

あの憎き竜を倒すその場面を。

夢のようなあの人との戦いを。

あの人はいつものように慣れ親しんだ武器を番え放つ。この時のために持ち込んだ爆裂の矢を惜しみなく放つ。一、十、百と。放つ場所は決まって胸、たまらず竜は怯むがそれでもお構いなしに放ち続ける。私も魔法を唱える。懐から断続的に魔法を唱えれるようになる薬も忘れない。彼女はそれに応えるかのように相手の動きを封じる。足を踏み出しながら彼女も薬を飲む。

詠唱も後半に近付くにつれ私の周りに炎塊が現れる。それを見届けると彼女は竜に詰め寄る。龍が飛ばぬように私は詠唱を終え解き放つ。そしてすぐさま次の詠唱に入る。空からいくらかの炎塊が竜めがけて落ち鱗を傷付けていく。彼女はその炎塊を足

場に竜の胸に張り付くと持っている短刀を振り下ろした。
彼女の得物が竜の胸を穿ったとき竜は深い悲鳴を上げた。しかしそれで攻撃を止める私たちではない。次に詠唱していた魔法を放ち竜巻を竜の胸元で起こす。彼女は風に巻き込まれないように獲物で自分を固定して衝撃に備える。胸は抉れ心臓部が露出する。それはとても綺麗な石のような物だった。見惚れそうなのを堪え次の詠唱に入る。
そこまでくると竜は全身を振り動き彼女を飛ばし、私を尾で弾く。私はなんとか武器で防ぐことに成功するが、彼女は受身を取れずに墜落したのか背中を強く打ち付けていた。
竜は彼女を両手で掴み力を込める。だいぶ離れているのにも関わらず骨が軋む音が聞こえた。まずい、急がねば。
先ほど唱えていた魔法を解放し救出を試みる。詠唱破棄とも言うが普通に魔弾を飛ばすよりも威力はある。私の体に紫電が現れそれが彼女に走る。それは竜にも走り奴は堪らず彼女を放す。視線だけで彼女は私に感謝を表す、私も頷くことで返事をして次の詠唱に入る。彼女は両手を地面に添えて足に力を込める。その足元に煙が発生する。
竜は上半身を持ち上げ口に火を溜めた。漏れ出す熱は辺りにある風景を酷く歪ませていた。それが放たれるのと私の魔法が放たれるのは同時だった。

私の杖から放たれたのは氷柱。いくつかに枝分かれしたソレの半数は竜の心臓に向かい、もう半分はその柱を覆うように竜の口に注がれた。竜の火炎は氷により阻まれ彼女は氷柱を足場に心臓に駆ける。彼女の通る道に一筋の光の線が出来上がり彼女は剣を心臓に突き刺す。そのの瞬間彼女が先程まで居た場所が爆発する。火柱を上げて氷柱を走り竜の胸にまで到達し破裂した。

その衝撃故か竜は空を仰ぎ咆哮する。地面が揺れるほど大きなものだった。

それを最後に竜は倒れた。決まって私もそこで目が覚める。

その光景を私は何度も見た。全く同じではないにしろ最後は竜を伐って終わる。

これを見るようになったのは彼女を失ったあの日からだ。私は彼女を求めて世界を旅した。山を越え、川を越え、海をも越えた。でも彼女はいなかった。そして世界すら越えた。それでも彼女はいなかった。

彼女はどこに行ってしまったのだろう。

探しても無駄なのだろうか。

「ステラ、もう起きたのかい?」

彼女の事を考えていると私を呼ぶ声がした。

「あぁ、また彼女とやらのことを考えていたのかな？」
「……」
　無表情で私の顔を見るこいつは私の仕事仲間だ。私は彼女を探すために情報と路銀を集めるために傭兵のようなものをしていて、割と情報が集められるこの場に長い間厄介になってたりする。この場の奴らが悪事というものを働いていたとしても彼女の手がかりになるならばしょうがない。
　雇っていもらってはいるが雇用主の名前以外は覚える必要もない。そもそも同じような顔が何度も現れて全部性格も違うときた。それに名前も長いし覚えるのがたるかった。だからこいつの名前は知らないが感情を一切表に出さない姿はまるで昔の――
「君もよく飽きないね」
「何が言いたい」
「……なんでもないよ」
　私の言葉に肩をすくめあいつは去っていった。なんだったんだ一体……。
　そんなあいつの背に続く人影が五人ほど通る。そのうちの一人がこちらへ来る。確か――
「何か用か、えっと……シオリだったか？」

「はい合ってます。未だ私たちの名前は覚えられそうもありませんか？」
「……あぁ、すぐには出てこない。だがアイツよりは覚えやすそうだから少ししたら覚えるさ」
急がなくてもいいですから。そう言って彼女は去っていく。あんな娘みたいなのがよりにもよって無表情野郎に付いて歩くかね？　まぁ私にはないカリスマみたいなのはあるか。そう思えばまたも彼女のことを思い浮かべる。彼女は私にないものを沢山識っていたし持っていた。
私は魔法使いとしてはそれなりに動ける。勿論武装を変えれば前衛だってできる。だけど彼女は別格だった。彼女は彼女なりに「器用貧乏だからあなたより強くない」と何度も言っていたが戦う場所を選ばないのは最大の利点だ。彼女といれば敗北なんてない。そう思える程だ。そして彼女以外などどうでもいいとも言える。まぁ、友と言うのは作れるならつくるが……こんなひねくれ者の私なんて好き好んで友になるやつはいないか。
……私は貴方の背中を追いあの頃の貴方に追いつきました。きっと貴方はあの頃よりもお強くなられたのでしょう。私の助けなんていらないくらいお強く。
私はきっと貴方を見つけます。それまでどうかお元気で。

届きもしない（でも届いたら嬉しい）ポエムなんて贈ってる暇があれば動けよ私……。
まぁいいか。今日も彼女を探そう。
「と、そんなことを考えているのだろうな」
「……お前か、デュナメス」
「デュナミスだ阿呆」
「……何の用かな、雇い主様」
「名前を覚えるのが面倒なら最初からそういえば良い。仕事だ、頼むぞ」
「はいはい。また殿か？」
「我らの逃げる暇を稼いだら撤け。適当に奴らの戦力を削いでくれるなら追加で報酬を払おう」
「いつも通りね。じゃあ終わったら適当に散策して帰るわ……彼女の情報手に入れたら教えろ。報酬はそれで全部返す」
それだけ言って私は戦場に出る。いつも通り、何も変わらない。報酬をどんなに積まれても彼女に会えないのでは意味がない。
どうせ見つかっても教えてくれそうになさそうだけど。

そのくらいは一緒に居ればわかる。正義はあっちでこっちは不義。傭兵じゃなかったら絶対やりたくないね。言ってることはわかるんだけどあっちを犠牲にしてまでやる意味がわからない。彼女ならどうするかな……？

まぁ……いいや。

転送陣が開きそこを潜る。その先に見えるのは正義の味方（彼らの敵）たち。やりたくない。やりたくないけどこれも彼女に会うためだ、諦めろ。大丈夫、殺しはしない。

「覚悟が出来た奴からかかってきなっ！　逃げる奴は怪我人連れて勝手に逃げろ！　覚者様のお通りだ！」

貴方に会える日を切に願って。

達成

▼

「あぁぁぁうううう」

自室に帰りベッドに身を投げ頭を枕に埋める。漏れ出す言葉は意味不明のもの。そもそも意味はない、吐き出したい、いろいろと。ぱたぱたと足を動かすがそれも意味はない。

言いたい事を言ってチサメに任せっきりで逃げ帰ったとか私は何がしたいんだろうか。ここまで弱かった覚えはない。あの時だって逃げずに戦えたのに何だろうこの為体は。そりゃあ一度は逃げ出した、だけど今回は大丈夫だと思ったのに。

チャチャゼロに手伝ってもらったのにこんな成果しかあげられないなんて……なんて言えばいいんだ。

後半なんて声が掠れて出ていたかも危うい。チサメがせっかく手伝ってくれたのに……。

ごろごろとベッドの上を寝転がり唸る。私は何をしているのだろうかと思うがやら

ねば気がすまない。気がすむわけないけど。

そうやっていれば呼び鈴が鳴った。……誰だろう？　チサメかなぁ。

重い足取りで受話器をとってみればセツナだった。それと声が遠いけどマナの声も。

「伝えたいことがあります」というセツナの力強い言葉を受話器越しだったが受けた。

ちょっと待ってと慌てて返す。心構え云々よりも顔を洗わねば……いや先に部屋にあがってもらわないと……というか逃げねば……いやそれはおかしいか。悩んでいて行動する時間が過ぎてしまった、勿体無い。とりあえず目をこすって二人を招き入れる。歓迎会に二人はいなかったはずだけど何で私の家を知ってるんだろう？　気になって聞いてみればチサメから聞いたんだってさ。

居間に案内してから向き合うが居心地が悪くて思わず視線を外す。いや、会いたかったんだけど今は目が腫れているから……。

「あの――」

口を開くがマナが手を前につき出して私を制する。そして息を吐くように言葉を放った。

「ふぅ……そうか。――刹那が言ってくれた通りだった。どうやら私は酷いことをしていたようだ」

「すいません高畑さん、いきなり訪れて。でもあの時のことは貴女が謝ることはないん

です。……あの時はいきなり武器を構えるような真似をして申し訳ありませんでした」
「私からも謝るよ。大事に至らずともあれだけのことをして口だけの謝罪にどれほどの効果があるかわからないがそれでも謝る、すまなかった」
「あ、やっ、わ、私も貴女たちに警戒させてごめんなさい」
二人が頭を下げてくれたが私も釣られて頭を下げる。……三者三様に頭を下げる姿はなかなかに混乱すると思う。私は混乱した。
「いや、ここで君が頭を下げては本末転倒なのだけれど……」
「そう、なの……？」
「私たちは君の間違いを正しに来たんだ。あの時のことは私たちの方が非があった、だから謝ったんだ」
「私たちを警戒させたことを恥じる必要はないんです。私を助けてくれたにも関わらず私は貴女を敵視した。非は完全にこちらにあるんです」
「それでも私は謝りたい」
「いや、ですから……」
悪いことをしたから謝る。だけど私は悪くない？　でも私は悪いと思ってる……？
あれ、なんかおかしい。そう思ってから口は自然と動く、そもそもチサメも似たようなことを言っていた節がある。チサメ以外からもだ。

「……私もしかして余計なことをしてた？」
「いや、余計とは言わないさ。だけど君が泣いた事は私たちが君を悲しませた事と同意義で、だからこそ私たちはそれを謝りたかったんだ」
「すぐに謝れなくてすみませんでした。」
その気持ちは大切だと学んだ。私はそれに倣って行動した。
謝られるというのは不思議な気持ちになる。今まで私はこれを強いてたと思うと尚更思う。あぁ……とりあえず穴があったら入りたい。後悔はない。けれど恥ずかしさは溢れそうなくらいあった。逃げたい。
「……今日はもう遅い。明日話してもいい？」
「あぁ、勿論。早とちりした分いろいろ話そう」
「私は……いえ、そうですね。私とも話しましょう」
「うん！」
もう遅い時間だったので長居させるわけにもいかず（多分彼女たちは警備もあるだろうし）少し話して帰ってもらった。早くチサメに謝れたよって言いたい。あとありがとうも言いたい。あとチャチャゼロやタカミチ協力してくれたみんなに言いたい。
その後はさっきと別の意味合いでベッドの上で暴れた。寝るのもそれなりに早かったと思う。よく覚えてないくらいには。

寝ている時にエヴァの声がした気もするけれどきっと夢だろう。

とりあえず謝れたことをみんなに報告する。タカミチ、茶々丸、チャチャゼロ、学園長の四人だけだけど。助かりましたありがとうございますの言葉だけだけど大切だと思う。エヴァにも言ったけれど今は忙しいみたい。なんでもやることがあって今は話す時間が惜しいんだってさ。

私のやりたい事が終わったことを学園長に報告したら暇なときに来て欲しいと言われた。勿論放課後に用事なんてあるわけがなく（チサメ関連を除く）即座に返事を出した。授業が終わったら即座に向かう。

用事というのは夜間の警備のことだった。やることといえば閃魔光を放って幾らかの鬼を退治して欲しいとのこと。適当に誤魔化すので思いっきりやってほしいとも言われた。流石に毎日やると都合が悪いので週一にでだけども。お給金もでるらしいので断りません。というか閃魔光一発でこちらは損耗もないので嬉しい限りだ。取り下げられたら困るので言いはしないけど。

夜間警備の時に連絡手段がないと困るので携帯電話というのをもらった。使い方はいまいちわかってないけど鳴ったら蓋みたいなマークのボタンを押して会話するらしい？　左が出る、掛ける。右が置く、落とすとかキャンセルらしい。とりあえず説明書

をよく読もうと決意した。けれどチサメに聞いてみればいろいろ答えてくれた。ついでに連絡先も追加してくれた。チサメとも話せるようになるらしい。携帯電話ってすごいんだねぇ。パクティオーカードだとエヴァとしかできないから不便だった。充電しないと使えなくなるようだからどちらが使い勝手がいいかわからないけれど。

まぁないよりマシとも言える。

あの件以降、私は二人と話すようになれた。といっても私では二人の会話についていけず学園内の会話のみしか話せていないが。こっちの言葉が曖昧なときにマナに翻訳を頼んだり、迷子になった時にセツナに助けてもらっている。私は二人に何かを返したいと言えば「もうしてもらった」の一言だ。私は一体何をしたのだろうか。

こども先生

▼

――夜の桜通りに吸血鬼が出る。

これは最近女子寮で流行っている噂話だ。女の子は噂好きとは言うが知る人も少ない噂だ。何しろ昔から似たような噂もあって広がり方がいまいちらしい。

私は女子寮に住んでいないが知っている。何故かといえばカズミが教えてくれた。彼女は面白い話を見つけては私に教えてくれる。流行に疎い私にも噛み砕いて、まるで体験したかのように面白可笑しく話してくれる。あんまりにも怪しい噂だったからチサメが「あんまりガセネタ吹き込むなよ?」とカズミに言っていた。でもこれ……多分ガセじゃないと思う。

その噂を聞いた頃の話だ。最近、エヴァが一頻り何かに夢中になっている。私一応従者のはずなんだけど一切教えてくれない。聞いても「お前が関わるほどではない」で終わる。取り付く島もない。

そして話は冒頭の噂話、吸血鬼が桜並木に出没する噂に戻る。夜な夜な女性の血を吸

いにやってくる。女学院がある麻帆良では餌に事欠かないだろう。誰かは知らないがいいところを狙ったものだ。

そんな噂があることをエヴァに伝えれば満足そうに頷くだけ。茶々丸もほんのり嬉しそうに彼女を見る。誰の仕業かすぐさま理解した。なんでもこれからやってくる先生のための行動らしい。私が関わらなくても問題ないってそういうことですか、そうですか。

やり過ぎないようにね？　と伝えたけれど笑みを一つ返された。多分何を言っても無駄とらしい。もしも止めたかったら好きにしろとまで言われた。

そしてその噂が起きてから暫く経ちもう一つの話題である新しい先生が来る日になった。

カズミはどんな先生なのかちょくちょくタカミチに尋ねるのを見た。セツナたちは「こちら側」ということくらいしか知らないらしい。私？　私もあんまり知らなかったりする。そもそもなんでこんなに皆が皆楽しそうにしているのもあまり理解できていない。フウカたちが楽しそうだから釣られてそう思えるくらいだ。タカミチの知り合いらしくどんな子か聞いてはいるのでみんなよりも詳しくはあるだろうが、こどもであって、先生をしなければいけない程度しか知らない。あとは名前くらいか。そりゃあ何かあったらフォローしてくれとは学園長から頼まれたけどさ。

私が知っていることはチサメには話した。学園長に頼まれたことも。困る前に相談しろって怒られた。最も過ぎて何も言えないね。

流石に会ってみないとどこまでフォローしたらいいのかわからない。しかもエヴァがエヴァで喧嘩売る気満々だから尚更難しい。仮契約してしまったのは早計だったかもしれない。それで助かった事もあるから悪いわけじゃないけど。

今朝、ホームルームの時間前にアスナが不機嫌な状態で登校してきた。コノカが必死に落ち着かせていたから大丈夫だと思うけど……。「あのガキが先生？」とか呟いたけれど……まさかね。

ホームルーム直前にフウカたちが先生が通るであろう場所に罠を仕掛け始めた。こども相手になんてことを……と思ったけれど知らないからしょうがないか。エヴァもつまらなさそうに本を読んでるので私も若干気を静めよう。これがこのクラスの歓迎方法だと学んだ。騒がしくなりそうだからチサメに耳栓を借りて本を読む。その際にチサメも浅くだが耳栓を付けた。セツナたちも騒がしくなるのを見越して我関せずを通していた。

そしてその時はやってくる。扉を開けて赤毛の少年が教室に入ろうとすると黒板消しがその頭に落ちる。そのままぶつかると思えば一瞬だけ黒板消しが宙に浮く。あ、早速やらかした。私の席から見える範囲だと生徒でそれに気付いた様子はない。その事

に安心していると黒板消しが先生に直撃する。白っぽい煙が先生を包みその後も罠に引っかかって、最終的に教卓に激突する。ギャグのように全部引っかかったな……というか大丈夫かな?

ネギくんは割と頑丈な子のようだ。まともに受身を取っているようには見えなかったけれどピンピンしていた。クラスのみんなには心配されてたけれど。

その後はしずな先生が取り纏めネギくんは自己紹介をし始める。そのあたりでチサメが両手で耳を押さえる。あ、耳栓越しでもやばいんだね。私も後を追うように耳を押さえすぐさま音の衝撃が走る。同性とは言え高音は辛い。

きりのいいところで耳栓を外して事の成り行きを見守ることにした。

案の定、彼はクラスにもみくちゃにされた。

その後はトントン拍子で進む。途中アスナが突っかかる場面が見れたけれど特に問題はなかったかな? あったとすればHR終了後タカミチ先生に呼び止められたくらいか。内容としてはネギ先生を気にかけてくれだったか。エヴァが何かやらかすようなので私としては胃が痛む話なんですけどね。了承したけれども。

休み時間になるとネギ先生から私は呼び止められた。名簿と見比べながら私のことを探していたようだった。

「ユキさんちょっといいですか?」

「初めましてネギ先生。タカミチ先生から聞き及んでる。大変だと思うけれど私でよければ力になるから」
「わぁ、ありがとうございます！」
「あまり派手に力を行使しないよう心がけて」
「き、気をつけます……あの、それでなんですけど」
「なんでしょうか？」
「アスナさんのお部屋に泊めてもらうように学園長先生から言われたのですが……もしもダメだったらそちらに行ってもいいですか？」
「……」
「どうかしましたか？」
「あ、いや。わかりました。もしもダメなら私の部屋に来て」
　学園長は何を思ってアスナの部屋を提案したんだろうか。確か同じ部屋なのはコノカで彼の孫なはず。仮にも男性であるネギを同室に導くとか……考えるだけ無駄なのだろうか。朝の状態を見る限り辛そうなので同室の件は同意する。自宅の場所をメモに書いて彼に渡す。彼はそれを受け取ると鞄にしまい去っていった。
　タカミチから聞いた通り彼は素直で良い子だった。ただちょっと魔法に関して無頓着でもあるけれど。年相応とも言えるか。

エヴァはそんな彼を襲おうとしているのだけれど……彼には注意を促しておこうか。もしも相談されたら答えることにしよう。好きにしろとは言われているのでそうすることにする。すぐに彼女も襲う気はないようなので注意しとけば大事には至らないだろう。彼女の性格上噂を蔓延させてから行動しそうだし。

「なぁ？」

「ん？　チサメ、どうかした？」

「やっぱりさ、十歳のこどもが先生っておかしくねぇ？」

「私もそう思う。けど彼の出身地だとそれが試験なんだってさ」

「誰情報？」

「タカミチ」

「あぁ、そう。……深く考えないようにするわ」

「悩み過ぎないようにね」

「お前もな」

そういう彼女の背中はとても疲れているように見えた。

大混乱

▼

基本的に私は賢くない。後先考えずに突っ込んで自爆……とは行かないにしろある程度傷ついて物事を解決してきた。誰かを傷つけて結果を出してきた。夢物語のように綺麗な終わり方をしたことなんてなかった。どんなに頑張っても結局はあの剣を使って初まりに戻って……。脱線した、今それは関係ない。とりあえず私は賢くない。それはわかっている。だけどこの現状、どうすればいい？

「んぅ……むにゃ……」

来ても良いとは言った。慣れない国で知り合いの知人に縋るのもわかる。不安そうな顔で泊まっても良いかと訊かれたら私じゃなくたってきっと彼を家に入れるだろう。だからすぐさま彼用の簡単な寝具を買った。その上でわざわざ彼にベッドを譲り、私は床に布団を敷いて寝た。それで起きたらこの状態だった。私に半ば抱きつくように寝ている先生が目と鼻の先だ。戸惑わずに居られようか。何のためにベッドを譲ったと思っているのか……。いや性別的には合っていて間違いなのは私かもしれないが。それと現状は関係ないと思う。多分。

色々な経験をした私だがこの状態は初めてなのでどう反応したらいいかわからない。そもそも相手は私と違って身も心もこどもなのでなにかしようって気にもならない。が、一応異性なので礼儀とかそういうのは弁えてもらいたい。現状のまま彼をアスナたちの部屋に行かせると彼女たち（主にアスナ）の休まる時間が減るだろう。でも普段の先生を見る限りこれは無意識に近い行動だと思う、若しくは習慣だろうか。だとすれば指摘するべきなのだろうか。

なんだかんだ言って戸惑っている私に結局妙案なんて思いつく訳もなく、彼が起きるまで私は動けないままだった。

とは言え遅刻するような時間でもなかったのは大助かりだった。このまま抱きつかれて遅刻なんてしたら先生にも悪い。なによりチサメにどやされる。起きて話してみればやはり習慣だったようでひとしきり謝られた。が、きっとまたやらかしそうなので謝られても困るだけだった。あんなに自然に入り込まれたら自戒したところで効果があるとは思えなかった。

……あ、先生の朝食はどうしようか。一応買いだめや保管庫に食材はあるから足らない事は絶対にないから安心だが、好みに添えるかは別だろう。

「先生、好き嫌いある？」

「い、いえ。今のところは特にないです」

「美味しいかは別としてすぐ作る」

今のところはってことはまだよくわかってないってことかな？　十歳なら偏食してもおかしくはないし。今ある材料も種類過多って訳じゃないし適当に二、三品作ればいいだろう。ご飯ものは好きだが炊飯器というのに使い慣れてないせいで時間が掛かる、私は基本的にパン派だからそっちなら用意もすぐに終わるだろう。なんなら私は強心薬なりなんなり飲んでその分先生のご飯に割り当てようか……いやそれだと先生一人が食事することになるか。せっかく来てくれたのにそれは忍びない。……早いとは言え考える時間も惜しいので適当にスープとサラダで済ませよう。

朝食を一緒に摂った……誰かと食事をしたのは久しぶりだった。私兵は容姿は人だがそんなもの必要なかったし、私も落ち着いて食事したのなんてあいつに会う前くらいだった。こうして食べるのも悪くない。美味しいって言ってもらえたし頑張った甲斐があるというものだ。

朝食だけ食べて「はい、さようなら」というのも酷いので一緒に登校することに。遅刻するような時間でもないのでのんびりと先生と会話する。内容は専らクラスメイトのことだった。私もまだ全員と馴染めているわけではないので偏った情報になるけれど、私の印象含めて先生に話した。セツナとマナに関しては私から言う必要もないだろうから少し濁したけれど。途中、先生が「どこまで知っているんですか？」といった疑

問をぶつけられたのでこっちの魔法関係は知らないと正直に答えた。ニュアンス的に合っているだろう。最初に馴染めてないって言っているし間違いないだろう。そしてこれは言わないといけない。

「先生」

「はい、なんでしょうか？」

「私は先生の味方、だけどマスターは敵」

「ますたー？」

「だからもしかしたら敵対するかもしれない。そうなったらごめん」

「あのっ、それってどういう――」

「あーっ!!　一緒に登校するなんてゆっきーずるぅーい！」

「おはようございますフウカ。部屋割りが定まってないらしいので仕方なく」

「おはようございますーユキさん、ネギ先生」

「フミカもおはようございます。先生、もしもまた困ったら気軽にどうぞ」

「わ、わかりました」

一方的ではあるが一応伝えた。マスターの名前も教えてないしエヴァの楽しみを奪ったりもしてないだろう。

先生は戦闘に関しては素人なのだろうか？　いや年齢のことを考えればエヴァに勝

てる見込みなどありはしないがタカミチが言うには英雄の息子だから普通のこどもよりは出来るだろう。エヴァの方がやり手なのは確かだが、現状の彼女は弱体化している。あれ程の魔法使いが私の杖（木の棒）で互角に戦えてしまっているなんて事が起きるわけがない。

　その私の見立てが正しければ戦闘力の善し悪し関係なく先生にも一応勝機はあるだろう。でももし、もしも万が一、先生やエヴァどちらかが過剰な攻撃をした場合にだけ私は出張るとしよう。エヴァがもしそれをやったら大人げないと言葉責めもやむを得ないが。……先生は色々と拙いようだし要注意するべきか。深く考えていると肩を軽く叩かれそちらに顔を向ける。

「ユキ、お前さ、なんでお前あの先生と一緒に登校してんだ？」

「おはようチサメ。先生の部屋割りが決まってなかったらしくて」

「おはようさん。でよ、担任になるっての急に決まったわけじゃないんだろ？　なのにか？」

「学園長が見逃してたとか」

「だとしても女子の部屋に行かせるか？」

「最初はコノカたちと同室だったらしいからそれよりはいいと思う」

「あぁ、確かにそれよりはいいな。お前一人部屋だし」

「そうだね」
「……なぁ、無理をする前にちゃんと言えよ」
「努力する」
「はぁー……前向きな言葉が返ってきただけ良しとするかぁ。じゃまた休み時間に」
「わかった」
　前向きに答えてしまったけれどこちら側ではないチサメに本当のことを告げて彼女は信じてくれるだろうか。案外、なんでもっと早く言ってくれなかったのだと叱られそうだと思うのは私の妄想だろうか。……いずれにせよ現状話すのは危険な気がする。
　もしも、彼女の身が危うくなれば完全武装で護りに入ろう。竜の心臓を使ってでも。
「高畑さん。災難でしたね」
「先生と寝泊まりしたんだね。どうだった？」
「セツナ、マナ、おはよう。先生は年相応だった。まだ習慣が抜けてないみたい」
「習慣なんて直ぐに変わることでもないですからね。私も大変でしたし……そういえば先生の部屋が最初、お嬢様の部屋だと聞いたのですが……」
「学園長の指示」
「……学園長……お嬢様と、こどもとは言え異性と同室にするとは……」
「何か企んでいそうだね」

「やっぱりそう思う？」
「お嬢様はとてもお優しい……先生の困った顔を見たら直ぐに協力するでしょうね」
「それを見越して？」
「そんな……まさか……」
そうセツナが呟くと「……だとしたら」と深く考察し始めた。途中マナがおーいと声を掛けるがまったく意に介さなかった。コノカの事となるとよくあるってマナが教えてくれた。
ふと、先生の方に顔を向ければアヤカがネギ先生に詰め寄っていた。早口なのでなかなか聞き取れないがニュアンス的には困っているなら私を頼ってほしい。だろうか？
普通の先生なら大丈夫（そもそもこども先生の時点で普通ではない）だが事が事なだけにそれもうまくいかない。先生的には断れない性格のようなので前向きな言葉をかけていた。その頃には魔法のことをうまく隠せれてるといいんだけど……。
「おい、話がある。休み時間に来い」
「ん、わかった」
さて、とうとうマスターに呼ばれたけれど一体何の用だろうか？

悪巧み

▼

ところ変わって別荘というか、エヴァのお家に着く。施錠を済ませ、地下に行き、そして魔法具の前でやっと事の中心を話し出した。ここまでするってことはつまりは大事なことだよね。タカミチから頼まれてるし、ネギくんからもお願いされている。でも繋がりとしてはエヴァから離れるのも……うーん。いや、考えるのは大事だが内容を聞いてからにしよう。

「さて、お前は近々ここら一帯が停電するのを知っているか？」

「……てい、でん？　どういう字？」

「……そこからか。停まる電気。つまりは明かりが消えて、機械が停まるってことだ」

電気が停まる？　なんでそんなこと――はっ!!

「――冷蔵庫！　なんでそれを早く言わないの！　買いだめしたばっかりなのに」
「何も真面目な話でそんな心配をするなよと言いたいが、大事なことだな。数時間程度だ、問題ない。まぁ氷菓類だけは処分しておけ」
「……うん？」
「今日はぼーやと登校したらしいな？」
「校長がアスナの部屋に住まわせる気満々だったから仮初めとして泊めたよ？」
「理由は別にいい。いや知れて良かったが。で、お前はどちらにつく？」
「……悩んでる」
「だろうな。お前はそう言うと思った。だから敢えてその判断を尊重させてやる」
「……」
「どうした？」
「どういうこと？」

いや、本当にどういうこと？　停電するから私はどちらについても構わないとか本当にどういうことなの？
本気でわからず頭を傾げていたらエヴァが「あっ」と何か思い出すように声を出す。

「あーそうか、すまんな。停電すら知らないのに理由が解るわけないか。停電すると私を閉じ込めている結界が弱まるのさ。ほんの少しの間だがな」
「つまり本気のエヴァ？」
「全盛期にはならん。魔力の貯蓄はままならんし練度も低い。が力は戻る」
「あー。わかった。中立にしとく」
「こども先生側でもいいんだぞ？」
「一回死ぬくらいは余裕だから危ない方につくよ。時間も決まってるみたいだからタイミング見ておく。時間も解るなら教えてね」
「任せる。時間はあとで茶々丸にでも聞け」
「何をするかわからないけど、チサメだけは巻き込まないでね」
「なんで……いや、わかった。そう睨むな。危害は加えない、それでいいか？」
「友達なんだ。とても助けられた。だからもし何かあったら――」
「……わかった。その日に本気のお前と事を荒立てる気はない。死んでも殺しに来るとか不本意だ。が、ぼーやを誘うために他で囮はするぞ？」
「ぐっ……傷は付けないよね？」
「こどもをいたぶる趣味はない」

流石に注文をつけるだけつけて要求を飲まないのは不条理なのである程度は頷く。口約束だが契約主と言えどそれをしたら本気で戦うことを辞さない。あいつの心臓を使う気はないがリディルを持ち出すほどには本気だ。

「取り敢えず私はぼーやに喧嘩を売る。逃げ道をなくして徹底的にな」
「私は本気で茶化すよ。エヴァにも彼にも」
「そうだな。それでいい」
「喧嘩をする意味は？」
「確証はないから言えん」
「なるほど」

ネギくんには悪いが肩入れしたいのはエヴァなので助力はする。無駄にはならないだろうし、衛兵に捕まることも無さそうだし。

「指輪、あげる」
「本当か?!」
「なんならこれの魔力使いきってもいいよ。言わなかったけど複数あるし」

「?!」
「でも加減してね。しない場合割り込みます」
「ぼーや相手に本気は出さんさ」
「幼女がなんかいってる」
「あ、ん?」

睨まれた瞬間、刹那の秘石を放り投げ移動する。戻りの礎は自宅のクローゼットに置いてある。普通に置いていたら仄かにでも明すぎて眩しいのだ。それと家がオートロックだから鍵を忘れたときに重宝してたりする。消える寸前にエヴァにまたねと声をかけて離脱した。

飛んで直ぐに休み時間だったことを思い出した私はチサメの携帯に連絡をすれば保健室にいったことにするとのこと。助かります……。

一応衣服の乱れが無いことを確認してからそのまま学園まで走り出す。今度学園長室に礎を置いていいか交渉しようかなぁ……。本音を言うと置きたい場所が多すぎるから減らそうとは思っているんだけどね。でも学校にひとつ、チサメにひとつ、エヴァにひとつはいいかなって思ってはいる。

んー、取り敢えずチサメには最後でいいかな。巻き込まないと言ってる手前、破綻した考えなのも理解している。心配なんだもの、仕方がない。インテリアには大きすぎる礎を渡す理由を説明出来得ないともいうが。どちらかと言えば礎を置くのではなく、刹那の飛石を渡す方が安心なのもある。使い捨ての秘石ではなく永久的に使える飛石のほう。

放課後になったら今後のために装備の確認しないとなぁ……。

▽

「またね」

「は？」

おい今何をした。そう思うが魔力が渦巻く感覚を覚えそれで消えた痕跡はなく、そこに元々居なかったようにあいつが消え去った。ただ、あいつが居たところには宝石のようなものがポツンと置いてあった。

可笑しいと思っていたがなんでもありとはな。拾い上げた石は効能が切れたのかわからないがただの石になっていた。本当に無茶苦茶だな。狙っていたかわからないが

あの指輪も貰えるようだしぼーや相手には勿体ないが貯蓄が残るならまぁ、使うのも吝かではない。

実験台とも言うが。

というか、指輪が複数あるだと……一つであの貯蓄量だぞ？　気のせいでなければあいつが嵌め直しただけで元に戻る代物だぞ？　そんなものが複数？　指に嵌めるまで魔力が外部に漏れず、嵌めればあいつ並の詠唱破棄、どんな威力も制御し抑制できるようになる。そんなものが複数……一区切りしたら一度あいつの持ち物を探るべきだな。

初めて会ったとき荷物は少なかったと思ったんだが。……いや、腰に袋を下げていたな。となると魔法で収納量をかさましてる可能性があるな。……いかん、考え出したらあいつの袋に対する興味のせいで本題が疎かになるところだった。備蓄が増えてやれることも増えるのだからそれを有効活用せねば。

クラスの奴等を囮に誘き出すのは確定（だが長谷川は除外）だな。愉しくなってきた。だが怪我をさせた場合あいつは止めに入るだろうな……。掠り傷程度は問題ないかと軽視してたが危ういか？

だとしてもだ、過程はどうあれ結果は変わらない。やることは確かに増えたが全力を出せるようになったんだ。感謝はしきれないな。

あいつが私の前衛になったらどうなるのかと少しだけ思ったが……些細なことか。

悩みの種

あの後、保健室の窓から学園に戻り時間をみると昼休みだったのでなに食わぬ顔で教室に戻った。チサメに視線を向ければ手で早く座れとジェスチャーで示される。

「で、なんかあったのか？　マクダウェルの奴が誰かを連れていくの初めてみたぞ？」

流石に話した内容のまま伝えられる訳がないので当たり障りのない部分だけ伝えることにしよう。

「特に何も。あ、でも停電するってチサメ知ってた？」

「あー、その話か。ユキは転入生だから知らなかったよな。教えるべきだったわ」

すまんすまんと言われたけど当たり前のことって気づかないことだし知れたことに感謝するべきだと思う。まぁ、買い出しに行く前に知りたかったのも事実なんだけどね……。あ、そうだ、チサメに手伝ってもらおう。

「アイスがあるの。消費するから手伝って」
「そりゃ構わねーけど……量によるぞ」
「バケツのが四個と棒が六つにこれくらいのでっかい箱のヤツが一つ」
「割とあるな。ってかそれメッチャ高いヤツじゃねぇか！　今日から少しずつ減らしてくのか……」
「どのくらい止まるか知らないから危なそうなの教えてもらっていい？」
「あんまし役に立てないと思うがいいぞ。あ、でもよ、確認したら何人か呼ぶか？　あの二人とかなんなら声かけとくぜ？」
「んー……そうだね。でもセツナは忙しいと思うから……あっ、でも教えてもらった携帯電話で連絡してみたいかも！」
「おっ、いいぜ。その辺りは帰るときに私のに一回試そうな。手紙の時の間違いがないようにスパルタでいくぜー」
「それは忘れてくださいませ……」
　放課後が凄く楽しみになった。手紙のことをぶり返されてとても悲しくもなったけれど。その話は私に効く……。チサメと停電用の機材を購入するのを手伝ってもらう約束を付けて昼休みは終わった。電気が消えたところで夜目は効くし、閃魔光でライトの代わりは出来るけど、初めての体験には胸が踊るのだ。その日はエヴァとネギくんの

対決があるから楽しめないんだけどね……。あぁどっちにつけばいいんだろうか。契約者としてエヴァにつくべきか、学園長に頼まれた分も含めてネギくんにつくべきか。中立といった手前曖昧でも構わないのだろうけど、心構えは必要だ。やる気が変わるから。普段の生活を見るとネギくん寄りのエヴァを支える方向性になる。ネギくん、地力が強すぎて制御できてないんだよね……。くしゃみしたら魔法が暴走するところを一度見たけど、異性にそれをするのは不味いと思うんだ……その年だと尚更で。

エヴァは相手を侮って慢心してるだろうし、暴走した魔法とかで万が一もある。いや、億が一だろうか。だから不安要素を無くすために指輪を渡したけど……入れ込みすぎ感も否めない。力の差は歴然だからこそ怖いのだ。それこそ、私が決めつけで範囲を狭めると行動力が下がる。しかし、手を出さない方が無難に納まる場合もある。

授業中も気になって散々考えたんだけどさ、ネギくんから私に協力してくれって頼まれる、若しくは敵対するかもしれないことに気付いたんだよね。エヴァに中立を勧められる前に余計なこと伝えたもんね。早合点したと本気で自分を呪ったよね。もうね。ネギくんを助けようとして割り込めば咄嗟に攻撃されかねないよね。中立だって伝えても疑われると思う。私なら疑うもん。あー!! あのときの自分が嘆かわしい！ ちくしょー!

「何百面相してんだよ、なんかあったのか？」
「っ!?　ち、チサメ」
「もうホームルーム終わったんだが聞いてたか？」
「や、あ、え？」

　言われて気付けばクラスのみんなが帰り支度を済ませて帰るところだった。あ、あれ、そんなに悩んでたの私っ?!

「まぁいいや、お前んち行きながら話そうぜ。私に言えないなら二人呼んだときに話せよ？　私から伝えとくから絶対言えよ。またあのときの様になったら本気で怒るからな」
「……うん。ごめん」
「だぁーもう！　謝るなってんだ」
「えっと……じゃあ、ありがとう？」
「そうだよ、それでいいんだよ。つかまだ内容聞いてねぇし、役に立ってもいねぇから謝られても困るわ」
「そんなことない。助かってる」

「お、おう。……先に下駄箱行くから早く来いよ」
「あっ、ちょっと待っててくれても……」

　言葉の途中で兎の如くチサメは走り去った。ぐすん。どうやって伝えようかな……。確かに二人にはすぐに説明できる内容だけどチサメにだって話したい。でも巻き込みたくない。うぅ……。

「あんれ、ゆっきー置いてかれたの？」
「カズミ。どうかしたの？」
「やー、どーかしたのー？　は私が聞きたいんだけどねぇ。楽しそうな会話が聞こえたもんだから参加しようと思ったんだけど、なんかちうちゃんは走り去っちゃうし、ゆっきーは意気消沈してるしでナニコレ状態なんだけど」
「ちょっと悩み事。一つは停電」
「あ、そっか。ゆっきーは知らないもんね。ちうちゃんからきいた？」
「うん。危ないの教えてもらう」
「そっかそっか。ヤバそうなら私も手伝うよーってちうちゃんに伝えといてー。今日は予定あってダメなんだけどね……」

「わかった」
「……一つはってことはまだあるの？」
「そう。けど」
「けど？」
「授業中も悩んでたけど、今は伝えていいのか悩んでる」
「わーお。誰かに言えるの？」
「セツナたちには伝えるつもり」
「ちうちゃんには？」
「チサメには……悩んでる」
「言いたいの？」
「言いたい。けど」
「けど？」
「おい、なにしてんだ朝倉」
「ゲェッ、ち、ちうちゃん」
「なかなか来ないと思って戻ってきたら何してんだよ、なぁ朝倉」
「ち、ちうちゃん怖いよ。引き留めてたのは悪いと思ったけどつい気になったからで……、ゆっきーごめんね。あとちうちゃんもね！　また明日！」

「あ、おいこら、逃げるなっ」
「明日以降なら手伝えるから――！」

カズミの陰になっててこちらから視認できなかったけどチサメが笑顔でカズミ語りかけていた。待たせてしまったことに大分申し訳ないとしょんぼりしたが視線があったチサメに気にするなと口の動きだけで言われた。そしてカズミその隙にチサメより早く走り去った。それを見届けたチサメは何時ものように頭を掻いてこちらを向く。

「……手伝うって何のことだ？」
「停電の」
「あぁ、そっち。それは素直に喜ぶか。てっきり――ぁ」
「てっきり？」
「あぁ、うん。何でもない。……帰り支度終わるまで待つから早く行こうぜ」
「あ、うん。すぐ済ます！」

「忘れ物ないようにゆっくりでいいぞ」って言われたけど待たせても悪いから忙しなく済ます。それにより睨まれたけど苦笑で誤魔化しましたとも。

その後はチサメに携帯電話のことを指導してもらいつつメールを送ることに成功したと告げよう。

てっきりの先のこと結局聞きそびれたけど……なんだったんだろう。今さら返しても迷惑だろうから聞かないけど気になるなぁ。

覚悟

謝れたことによりそれ以降、大分素直になったユキを隣に自分じゃ珍しいくらいに仲良く下校する。

話の内容は専ら停電についてである。そこから枝分かれするように普段の私生活についてで、やっぱりユキはパン派だそうだ。ご飯は嫌いじゃないにしても準備に時間がかかるから苦手だそうな。少食らしくリンゴをまるごとかじったり、ブドウでジュースを作ったりが主らしいってな。

自炊するのかと訊ねれば割りとするんだと。場所によっちゃ飯マズで有名な場所もあるから少し気になってたんだよな。食堂のと比べてるもんだから言わないだけでって、そりゃ普通だろうと突っ込みを入れた私は悪くない。悪乗りと思いつつも弁当を頼めば二つ返事でＯＫ貰えて吃驚した。自分以外に食べさせるのは懐かしいからと言ったときのあいつの顔を見つめる程度には。

頭で考える前に誰にと訊いてた私には引いた。幼馴染みの同性と聞いて脱力した自分にもうドン引きした。朝倉じゃねぇんだから踏み込みすぎである。もしも異性だっ

たらどうなってたんだか……。深く思考が沈みかけると唐突にユキが「あっ」と思い付いた様に声を出した。

「チサメは嫌いなものある？」
「食べ物に関しては特にはない。が、何を作る気なんだよ」
「パンが多いから、コンビニで食べたサンドウィッチを真似したいと」
「あー、それなら心配もないな」
「辛いの平気？」
「人並み。具になんか入れんの？」
「具じゃないけどカラシを少し」
「カラシ？　なんでまた」
「薄く伸ばして具を固定するの。マヨネーズも混ぜるからそんなに変な味にはならないしパンも持ちやすくなる。筈」

筈とか付けるもんだから不安になるのはしょうがないわな。大丈夫かと目で訴えれば合っていたはずの視線は横にずれていく。本気で不安になるから止めろよ!?

「前に家電を揃えたときに調べた。けどお店のよりは美味しくないから」
「またそれか！　それはもう気にするなっての。一旦置いてろって」
「……オープンやサブマリンも良い、でも運びにくいから普通でいい？」
「オープンとかサブマリンとかはよくわからんが任せる」
「わかった。量は？」
「コンビニのやつで考えると三つ位あれば足りると思う。余ったらエヴァンジェリンやらにでも分ければいいんじゃね？」
「……！　そうだね。そうする」

余計なこと言った気がするので鞄に入る量にしろと歯止めをかけといた。私自身大人数で食べるの苦手なのもあるしな。お祭り騒ぎのあいつらとは壁を作っておきたい、切実にだ。一度輪に入ったら休みの日すらお祭り状態は確定だろう。休みの日まであいつらのテンションにのまれるのはごめんだ。……ん？　休み？

「そういや、ユキは休みの日なにしてんだ？」
「んー」
「食品サンプルでも練り歩いてんのか？」

「それ初めましての時だ。お店巡りは確かに好き。知らないもの多い。見るの楽しい。道具集めも楽しい」
「まぁここは大抵揃うし、店も多いからなぁ」
「チャオお店開いてた。驚いた！　すっごい」

興奮してるのか喋り方が可笑しいのはご愛嬌ってやつだな。帰り道にある売店に並んでるサンプルにもよく止まって眺めるからほんとに好きなんだろう。超の店はクラスでも人気だと伝えたら絶対に行くと息巻いてたが、食べてまた意気消沈しないといいんだがな。

その後も私にしては珍しく話に花を咲かせユキの部屋に。歓迎会は確かに参加したが生活感が増えて寝具が増えていた。あぁそういや先生泊めたんだったな。

家具の類いも前より増えてた。ボタンの数が少ないのは全部に共通してたけど。ボタンというか機能増えると使い難いんだと。炊飯器もそれがネックであまり手が出せてないっぽいな。老婆心ながらもそれでパン作れるぞと言ったら目を見開いて驚いてたな。ま、それはおいおいだ。今は目的を果たそう。

「メモの準備できた」

「じゃ、ヤバめなのからな」
「お願い」

最近買い込んだって言ってたから警戒しつつ冷蔵庫を開くが案外余裕だった。でもユキの冷蔵庫は一人暮らし向けの安いタイプで冷凍物は危険信号なのは変わらなそうだな。クーラーボックスである程度は緩和できるだろうけどでっかいのはちと無理臭い。

最初に考えていた通り、アイスを処理することに。掬う道具やらも買い込んでいたようで見てはいないが一通り揃ってるんだろう。普段何に使うかわからない道具の類いが。取り分けて対面に座りそろそろ良いだろうと口を開く。宛がない訳じゃないんだよな、怪しいのは多いから。

「で、悩んでたのは危ない話ってのか？」
「うっ……そう」
「そうかー……それってよ、ネギ先生関連か？　それともマクダウェル？」
「……」
「やっぱ言えないよなぁ。アイス減らそ――」

「チサメ、これ」

進まない会話をしても意味無いかと冷凍庫にてを伸ばそうとしたが慌ててユキに向き直す。これと言われて山なりに放り渡されたのを両手で掴む。掴んだものを見てみれば掌大の宝石だった。

「なんだこりゃ」

「危ない目に遭ったら、ここを考えて軽く上に投げて」

「は」

「少しだけ言う」

「……わかった」

「内密に処理。バレると危険。知れば戻れない。弱さは死」

物騒な言葉だった。もしかしたらさほど危なくないと気軽に思ってた。ゲームで普段耳にするが、何て言うのか……重みが段違いだった。

「私は、守れるか不安。貴女を、関係を」

「……だから言えないのか」
「その勇気がない。考え過ぎとエヴァに笑われた」
「うちのクラスは考えなさすぎなんだ。お前は変わらなくていいと思うぞ」
「ごめん」
「謝んなって。私が軽視し過ぎたせいだろ。謝るのは私のほうだって、ごめんな」
「そんなことない」

口を開く事に気が沈んで行くのが目に見えるようだ。視線はかち合っているが実際に肩は下がり、先程から唇を噛み締めていた。

「なぁ」
「……なに」
「もしもさ、もしも私が巻き込まれてさ、その一端を知って危なくなったら――」
「守る。絶対に」
「相手を害してでも、私が死んでも」
「絶対に助ける。嫌われても、あいつに頼ってでも絶対に」

覚悟が足りなかったのが痛いほど解った。死んだら守れないと茶化す気にはならないほど念が籠っていた。そうなったら頼る、だから言えないのは全部言わなくていい。そう答える前に体が動いた。抱き締める形になったが顔を見ないで話せるのは少し楽だと思えた。顔色を伺わなくて良いのは本当に気軽だから。

「悪い」

「……？」

「変なこと聞いた。それから、もしもの話でも真剣に答えてくれてありがとうな。でも私は守られるだけじゃ嫌だ。せっかく知り合えた、友達になれた。何かしたいと思ったんだ。困らせただけかもだが」

「そんなことない。言うのは怖いけど、言いたくない訳じゃない。それは伝えたい」

「あぁ、伝わった。何かあればお前を頼る。桜咲たちにも頼る。それでいいか」

「エヴァも頼りになる」

「頼らせてもらうさ」

あやすように回した手で背中を撫でる。恥ずかしいのかユキは逃げようとするがその場合はガッチリと抱き締める。こっちが隠してることは些細なことだがもはや吹っ

切れた。

「なぁ、今度私の趣味に協力してくれないか。停電終わってからでいいから」
「……趣味？」
「そ。悪いようにはしないから」
「良いけど。私に出来る？」
「出来なきゃ言わないさ。それと」
「それと？」
「いつか、許可でもらって、お前のしてること、お前のこと、お前の悩んでること話してほしい。嫌わない、嫌いにならないから。口で言うのは確かに信用できないかもだが、話したいって思ったときでいい。認めてくれてからでいい」
「うん。わかった」

名残惜しいからゆっくりと体を離す。目線を合わせて告げる。

「じゃ、この話は一旦終わりだ。長く続けて悪かった。アイス、処理しようぜ」
「お願いします」

「任された！」

いつか、いつか心のそこから支えたいと、そう思った。危なくても、死にかけても、それでも。

暴走

「で、主人が辛いときにお前はお友だちとなかよーく二人で処理に明け暮れてたと」
「……面目ない」
「そーか、そーか。楽しかったかぁ」
「本当に申し訳ない」

なにがどうしてこうなったかと言われれば直ぐに言えるが何をいっても聞いてはくれないほど少々面倒臭い現状のエヴァには全て言い訳になるので甘んじて受けることにする。そもそも風邪とか事前にわかるわけもない。流石に風邪に効く魔法は持ち合わせていない。体力は回復するかもだが、いや、試したことはないから効くかもしれないけど、そういうのは自然に治したい派なので、使いたくはないというのが本音である。その態度で渋った様に思われて今に至る。普段は風邪ひかないなら懐かしさを噛み締めて甘んじればいいのに。病気になれない私からすればとても羨ましいのだけども。無い物ねだりなのは理解しているが確証もないのに試すのも悪いよね。

「起きて大丈夫？」
「……大丈夫だ」
「少し休めばいい。敵はいない」
「そも、敵になるやつはいないが正しい。だがその提案には乗ってやろう。それでお前は――――」

そもそも会話してるけど目線が一度も合ってないのは大分おかしいよね。多分私が気づいてないだけで会話もずれてると思う。何かしら違和感を感じてはいるけど何処がと言われてもわからないのだけど。エヴァ自体が可笑しいのは気付いてるけど熱あると朦朧とするし、そのせいだろう。病気にならないけど人体発火で似た体験が出来る身としては知ったかぶりをしたい。現実逃避とも言う。

一言で言えば酔っ払いの相手をしているような感覚だ。本人に聞かれたらただですまないの明白なので絶対に口には出さないけど。

茶々丸にエヴァか大変だと言われてきてみたらこの調子である。そして当の本人は部屋の隅で此方を観察するのみ。チャチャゼロはケケケといつもの笑いで此方を眺めている。エヴァに捕まる前に適当に流せとありがたい御言葉をいただいてなかったら

嫌いになっていたかもしれない。ベッドに腰かけているエヴァに対し、私は何故かその下で正座して仰ぎ見ている。たまに高らかに笑うエヴァが無性に様になってて羨ましい。私はそんなに格好よく笑えない。と、現状から少しでも思考をずらさないと足が大変なのだ。なんだ正座って。これかなり辛い。苦行である。誰か助けて。

おっと、思考をずらさないと。痛いところに意識を外すようにチサメとの会話を思い出したり、セツナやマナとのメールを思い出したりしてなんとか苦し紛れをする。……うん。最近厄介ごとを持ってきてもらった以外でエヴァと会話してない。些細なことでも話してない。チャチャゼロや茶々丸には相談した。それしかしてないとも言うが。

なんだかんだ言ってタカミチとはテスト用紙のこと含めて話すし。少しずつ日本語を増やしてもらっているのだ。数学のような式を見ればわかるようなものは日本語になっていてわくわくしている。平仮名多目だけど。国語はまだ難しいので全部英語のままだが。

学園長の様なトップの人とはあまり話さないのが正しいのだろう。理由もなく忙しいなか向かうこともないと思っているのが正しいが。

ネギくんは結局アスナの所に上がり込んだようだ。追い出したのが悪いと思ったようで（それはそれで可笑しいのだが）アスナが妥協したらしい。一応、ネギくんの習慣は話したけどコノカから聞いた限りでは治ることはなさそうだ。

うん、やっぱり思考をずらすだけじゃ無理。足がいたい。というか足が石化したかのように動かせない。でも軽く触るだけで痺れるから変な感覚である。誰か助けて。思いっきり伸ばしたい。普段やらないけど柔軟体操したい。切実に。

思考を一旦目前に向ければ瞑目して私ではない私にエヴァは語り続けている。しかし、足を崩そうとすれば直ぐに正座しろとそこだけははっきり意思表示する。なんなのだこれは、どうすればいいのだ。

とりあえず、停電の日はネギくん寄りに、支援から援護に考えを改める必要性がある。いじわるにはいじわるだ。

装備もお遊び程度のものじゃなくてガッツリ本気に変更である。流石に実体のある遠距離武器や、両刃の近接武器は出さないが、私も指輪装備をしよう。一つ以上は効果ないけど片手指にぜんぶそれを嵌めてやろう。一個で驚いてるエヴァの度肝を抜いてやる。意味はないけど。

装備は魔導弓にワンドに片手剣と盾。相手の魔法矢は魔導弓である程度相殺して、詠唱長いのはワンドのバフありきの盾で防いで……ふふふふふ、考えるだけで楽しみだ。風邪が治ったら覚えておけ……。

推理

最近、高畑さんの様子がとてもおかしい。

しかもその変化は唐突に、先週までは普通だった筈なのに、今週から別人になったかのように寡黙になった。挨拶をしても素っ気ない声を返すだけ、普段仲の良い千雨さんに聞いても知らないそうで。一言気になったことがあるとすれば、確証はないが、エヴァンジェリンさんに会いに行ってから可笑しくなったそうで……。メールで相談があると言われてた私と真名は二人で首を傾げるしかできない。いや、一度、真名の方には相談と言うには物騒な事を話していた。確か、素顔を隠すには覆面が良いよねと。謎が深まるばかりである。千雨さんは普段着ないような服を買い漁っているという現場証拠も撮られていて、事件の香りしかしないのは止めるべきなのでしょうか。

頻繁に学園長室にも向かうようになっていたので、詳細を求めて真名に行ってもらう事になってます。高畑先生も特に聞いてないようで思い当たることも少ないと言っていました。

ネギ先生にも聞いてみたのですが、ユキさんとは会話できなくて嫌われたんじゃとかそういった心配はしてましたね。会話もなく嫌うことはしないと思いますが不安になっていたようでした。以前あった宿泊に関しても嫌な顔はしてなかったと記憶してますし。ただ、話を聞いていくにあたって、エヴァンジェリンさんの話になると苦笑を洩らしてました。何かあったのでしょうか、今は関係ないと思うので記憶の隅に残す程度でいいでしょう。

いや、一つ違うところがありました。エヴァンジェリンさんとの会話を一方的に切る場面は何度か見ました。普段の高畑さんなら絶対にしないことだったのでよく覚えてます。直ぐに思い出さなかったのは未だにその光景を信じたくない故でしょう。その時のエヴァンジェリンさんはうちひしがれたようにしゃがみこんでいたし、茶々丸さんは嬉しそうに笑っていて、なにが何やらな光景でした。

真名には一応、口での会話を盗み聞いてもらっているところだ。

「まぁ、ほっておけば良いだろうさ」

「……理由は？」

「ユキが楽しそうにしてるからだな。ほら、妄想してるときに百面相するやつがいるだ

ろ？　いいんちょの奴が良い例だ。てか、いつもストレス貯めてばっかなんだから少しは発散させてやろうぜ」
「理解できなくもないですが」
「事実を聞きたいって言うのは解る。かなり気になるよな。……けどさ、私だけ知らないでお前らが知ってることがある――として、それを話してくれ。と言われて答えれるか？」
「それは……確かに言えませんが」
「ホントにヤバイもんの区別はユキにだってあるだろ。言ってて不安になるが多分」
「それもそうですね。もしもダメそうなら此方で協力して止めます。相手はがわからないので先手は取れませんが」
「は？」
「どうしたんです？」
「あ、いや、何でもないぞ。気にしないで良い」

私の一言で千雨さんは首を傾げるが、何でもないと直ぐに頭を振った。そうしていると真名が合流する。

「おや、話は終わってしまったのか」
「龍宮、首尾は？」
「変わりないな。私たちのように一方的に会話を切ってる。相手側の方からは『私が何をしたんだ』的な言葉を耳にしたが、それ以上は……」
「十分じゃねーかな。っとなると……ネギ先生がこの前風邪で休んだエヴァンジェリンに何かやらかして、その後にエヴァンジェリンに会いにいったユキが何かしらやられて……ってのが妥当かね」
「えっ？」
「あぁ、私もそう思う。ネギ先生が関係ないとなるとそうなるな。茶々丸は知ってはいるが話してくれはしないだろうし」
「……えぇ？」
「あとは私は関わらない方で。任せていいか？」
「あとで何か奢ってもらいたいな」
「超のとこでデザートくらいでいいか？　ユキが行きたがってたんだ」
「それは良いことを聞いた。暇な日に合わせてくれると助かる。ユキとの食事は見ていて飽きないからね」
「あ、あのー……」

「じゃ、机戻るから、桜咲に説明頼むわ。報酬となると龍宮だけで辛いからそこは理解な。言えそうなのは協力すっからそういうことで」
「あぁ、任されたとも」
「……」

今までの会話でそこまで理解できるとは……もしかして、もしかすると、私の考察は無駄だったのでしょうか。

「とりあえず刹那は護衛の合間にユキの行動を見ていてくれると助かる」
「……」
「推理話なのだから得手不得手がある。不貞腐れるな」
「それはそうですが……」
「君も一緒に参加できるようになると良いな」
「それはそうですが……」
「聞いているのか？」
「それは……はぅ」
「はぁ……考えるのは此方の作業だ。聞き分けの良い協力者もいるのだから私たちも迷

惑にならない程度にサポートしようじゃないか。そうだろう?」
「指示は任せますよ。とだけ」
「不真腐れるなと……あぁ、任されたともさ」

慰められるかのように背中を叩かれ席に戻る。
何故でしょう、同い年な筈なのにこの差は。とても負けた気分になる。その分別の、自分の得意分野で力を示せば良いだけなのですが釈然としません。完全敗北した気分と言えばいいのか、この、なんだろうか、変な感覚を形容できない。

前準備

気分が高まり割りとここ最近の事は覚えていない。だが今更それを考える必要は皆無なのだ。

罪は幾らでもある。この世界ではないに等しくとも起きたことは直せない、正せない。それが実りあることだとしても全てを掬(救う)うことは不可能なのだ。人であれ、私のような化物であれど。所詮は闘争に生きる狂人なのだと理解した。

準備するだけでとても愉しいのだ。それを振るえると思うだけで笑みが溢れる。顔に張り付くような深い笑みが。私はここまでの狂人だったのか。向こうの世界では生きるためと行使した力は、根本としては邪な考えであったのかと己を恥じた。そう考えることで罪の行き場を定めているだけだと思うと空回りする。やはり私は人にもなれない、竜を殺すだけが取り柄の血生臭い兵器か。

思考が悪い方ばかりに進むが手は作業を辞めない。体は正直だとよくいったものだ。頭と体は別個体とも言える。

と、長く言ったものを軽く言えば日常生活でたまったエヴァに対する鬱憤をはらした

いだけである。あの拷問に対する割合は相当あるが。ちょっとシミュレーションを描きすぎてここ最近話し掛けてくれたみんなに悪い事をしたと今更ながら思った。一人楽しんでたせいでとても気まずい。なので、一頻り落ち着いた頃に三人にはとりあえずではあるが電話で言い訳紛いの謝罪をした。その際に食事のお誘いがあったので今は浮かれている。他のクラスメイトも心配してたようで本当に申し訳なかったと謝り倒した。

ネギくんは先生として私を何度か気にかけてくれていたので変なタイミングで割り込んで誤射されても文句は言わないようにしよう。彼が主に使う魔法の一つに武装解除があるが、もし剥かれても恥じるものはないし、逆に悪いと思うまであるのでタカミチに防ぐ術を聞いておこう。力任せに防げるなら良いのだけど。

別日。学園長やタカミチに停電の事やネギくんの武装解除（と言う名の暴走魔法）の防御法を聞いた。前者はチサメから聞いた内容とほぼ同じ、後者は範囲内に居ないことが一番だと頼りにならないことを言われた。理不尽の極みに近い魔法なんだねあれ。魔法が便利なのはとても理解したが彼にそれを教えた人物を私は絶対に許さない。

対策として考えたのが一つ、武装解除の威力がどうだかわからないが火炎衣を纏って短期決戦を仕掛ける。……はて、ふと思えば何故ここまで躍起になっているのだろう。

火炎衣は顔を隠すのに向いているとはいえ、あれは文字通り火炎に包まれる。体力的にも辛いし、見た目的にも悪者だ。強さ的にはありだがインパクトが強すぎて嫌われる技だ。街でやると有能すぎる衛兵に即組伏せられる技だ。先生というか子どもに見せる技ではない。エヴァは腹を抱えて笑いそうだが。

もう素手でいっか。痛まないように布を手に巻くだけで、素性を隠す必要も無いだろうから当て布程度を仕込むだけ。枝一つで魔法使えるから持ちやすいの拾って。ネギくんの武装解除は下着になるだけっぽいし水着とか仕込んだら多分防げそう。でもその目論見が外れて防げなかったら全裸……流石に辞めとくか。

その考えなら武器が無くなるから軽装になるな。服装も……制服でいっか。そもそも隠す必要本当にないな。なんで今まで……あぁそうか使う魔法が悪役まっしぐらなのか。子供向けの表現じゃないからなぁ。他人の命削って射つ矢とかある時点でひねくれてるし。治療に関しては秀でてるけども破壊する方が圧倒的に楽だし……。うーん、顔だけでも隠すべきかなぁ……。嫌われたらやだなぁ、なんて思うのは悪いことだろうか。

客観的にズバズバ言ってくれるチサメのような人に相談したいけど、この件でチサメは頼れないし、二人に燃えてるところ見せたいとか思わないし、そういうの説明できる人いたかなぁ……ん？　ズバズバ言ってくれる人……？

▽

「デ、何デオレニ言ウンダヨ」
「参加しないって茶々丸から聞いたから」
「確カニ、参加シナイガ。シナイガ、参考ニナルト思ウカ？」
「だって、物騒なこと聞ける友人居ないから」
「オ前ナ……オ人形遊ビモ大概ニシロヨナ」
「断らないってことは答えてはくれるの？」
「アー、ンー、マァイイケドヨ。ケケ、今度整備シテクレ。最近チョット関節ガナ。礼ハソレデナ」
「うん。私でよければ」
「デ、オ前ノ魔法ノコトヲ言エバ良イノカ？」
「ネギくんに悪影響あるかどうか、だね」
「一回シカ見テネェカラ細部迄ハ忘レテルゾ」
「見せていくよ。それで判断して。ちょっと離れるよ」
「悪ィナ」

一つずつ技名を言いつつ見せていく、途中途中で唸ったりしたが最後までじっくりと見てくれた。おいおいと嘆くような声もあるので若干ながらに戸惑いも混じるがヤケも混じり全て披露した。

「大抵ノ魔法ガヤバイ。火炎衣ッテノハ一番ヤバイ。ソレ初見タガ絶対使ウナ、人型ガ燃エナガラ話ストカホラーダゾ。光ルノハ子供ウケイイダロウガ、燃エルノハナイ」
「わかった」
「魔導弓ダッタカ？　アノ辺ノ魔法ハ使エルダロ。デ、素手ハ確定ダナ。事後処理デ回復ノ為ニ杖ハ持ッテロ。攻撃用ノ杖ハヤメロ、アリャ対人ニャ向カネェ。ゴ主人向キダガナ」
「そうする」
「使ウ魔法減ッテ、ゴ主人ニ勝テルカ？」
「勝つ必要ないからね。元々は正座の恨み」
「アー、ソレハ、マア、悪カッタ。忘レテルゴ主人ニ替ワッテ謝ルワ」
「割り込む必要無さそうだけど、指輪渡したとき誘われた気がした」
「……ナルホドナ」

「だから、精一杯応えたくて」
「終ッタラ今ノ伝エトクワ」
「お願い」
「武装解除、当タラナイトイイナ」

その台詞には苦笑しか返せなかった。私の微妙な顔に謝られたがそれも困る。本当に。

やんちゃ

おおまかな方向性と自身のやりたいこと、身嗜みを決めたが魔法の防ぐ術はあれど素手でその他を防げるのかと、そう思う。不安はあるし準備不足も否めない。私が介入して円滑に済んだことなんて無限に続く世界で数えることができる程度という。自信の喪失は難しくない。

と言うか破壊力＝印象悪がピッタリ当てはまるあの世界の魔法が全て悪い。火炎衣しているやつがヒーリングオーラ出しても誰もそれが癒しだと思わないだろう。入ったら不味いと思わせることができるのは敵を前にして強みだが説明したところで味方から信用される要素は皆無だ。ネギくんは信じてくれそうだが子どもに通用したところで嬉しさが減るのは悲しみ以外のなんでもない。

全てに於いて嫌なことというのは早く訪れるのである。気が付けばもう停電の日、準備不足感は拭い切れないが最早負けるのもありと開き直る事ができるのは幸いだ。犬

畜生並みのしぶとさを見せる意気込みで外をぶらつく。出立前にチサメには派手に暴れるとだけ言っておいた。苦笑して何時ものように笑いあった。負けたら笑ってやると言われた。思い切りやると決めた。

無計画に歩いて見つかりませんというのは割とあるが、そうはならない。指輪を渡した理由が探知のためである。そりゃ理由を付けてでも持たせるさ。自分の魔力反応を辿るくらいは私にだってできる。逆手にとられて家に置きっぱもないだろう。派手に動いてるし。

ということは始まっているってことか。急ごう。

ショートカットをするために電柱を飛び写りながら指輪のもとへ向かうと即見付けた。遠目で見るエヴァは凛々しくて、対するネギくんは辛そうに顔を歪める。弱いものいじめの現場である。傍らにそのネギくんを心配そうに見詰める茶々丸とアスナ。さて、いつ割り込もうか。割りとネギくんは善戦しているようだ。エヴァが指輪に振りまわされているともいうか。属性違いの矢で対抗するがネギくんは押し込まれていた。何時でも割り込めるように魔導弓をつがえて狙いを二人の中点に置く。口上を述べながらエヴァが魔法の矢を大量に呼び出す。負けじとネギくんも出すが込められた魔力が段違いで結果を見る前に魔導弓を解き放つ。一つの矢につき三つの光をもって相殺

に掛かる。間を置かずして私はネギくんに駆け寄った。

「っ!?　来たか！」
「待たせた？」
「文字通り遊んでやっていたところさ。前菜には丁度よかった」
「え？……ユキ、さん？」
「ネギくんお疲れ様。少し割り込む」
「え、ちょっ、ユキさん!?」

ネギくんの静止を聴かずに地を蹴りエヴァに肉薄するが残像を残され間を置かれる。遠距離戦をご所望なようで詠唱もなしに矢を放たれた。前のめりな私に有効的な解答をされた。だからと言ってそれが最適解とは言えない。つんのめりながらもそれが当たり前のように魔導弓で数十を打ち落とす。自動照準はベリグッだね。速度もあっちより遅いから膜のように張れば壁にだって出来る。

というか火力調整難しいな。自然に被害が出ないように火力抑えたけど、少しだけ木が凍っちゃった。つまりエヴァの魔力を打ち消せてないってことで……抑えず普通に撃ってみる？

幸いにして彼女は矢を止めどなく打ち続けてくれている。指輪の魔力で相手の損耗はないようだしこちらも試行錯誤できるから助かる。試してから数発で影響の出ない威力まで絞れた。割りと本気の辺りだった。指輪のせいもあるけど悔しい。こっちの調整に途中でエヴァは気付いたようで、強弱を着けてくれたのは助かった。苦笑混じりに笑ってたから間違ってないだろう。その間もネギくんは動けていないのを見るにこっ酷く絞られたようだった。少し間を置いてまた矢を撃ち出してきたので応戦する。が、太さが違う。

防御姿勢でネギくんに攻撃が逸れないように回避行動をとるが、狙いが絶妙過ぎて悪手にしかならなかった。防御した筈なのに膝が震える。

そんな私を見て彼女は口を歪めて笑う。悪戯に成功した時のような無邪気な微笑みで。それを見て私も負けじと犬歯を見せながら笑う。吸血鬼に噛み付く犬畜生にくらいはなってやろうと。

「なんだなんだ。割り込んできたのに初手から崩された増援なんぞ期待外れも甚だしいな」

「そうだね。貴女の力を侮った。指輪を渡したことを後悔したよ。というかネギくん相手には本当に可愛がっていただけだったのか」
「いい贈り物だよ。全盛期とまではいかないにしろ懐かしい気分になれる」
「なるほどね？　サバ読みでもしたと若者の私は騙された気分だ」
「言うな生娘」
「言ったよおこちゃま」

　年齢はどっちが上なんだろうね。悲しくなるから答えは聞きたくないけど。と言うかさ、あっちの魔法って感情で威力変わるんだね。肌で感じる力に寒気が混じったんだけど。いや、まて、それは冗談で出していい魔力じゃない。

「ちょっ」
「大丈夫さ、死んでも復活できるんだろう？」
「そうだけど、やっていいことの境界を考え、」
「詠唱しないのって楽しいよな。おこちゃまはおこちゃまらしく楽しませてもらうよ。オネエサン」
「薄気味悪いことを言うね。どんなに気味が悪くても体を駆け巡るのは強敵と対面した

それのままで違和感だらけだよ畜生」

　悪態を吐くこちらに浮かべた笑みを深めることで対応したエヴァは悪の魔法使いそのままで、あいつを思い出してこちらも笑ってしまう。あぁ、今なら本気になれそうだよ。正座の恨みを少しでも晴らせたらと考えていたけど止めるよ。それ、本気の殺意じゃないか。

　一回死んだら終わりの短くて儚くて軽い命だけど出しきってやるよ。だが矛盾するけど一回で終わると思うなよ?

「私を本気にさせたこと、少しだけでも後悔させてみせる」

「何を言っている、私はただ、遊んでもらっているだけさ。そうだろう、オネエサン?」

「あぁ、そうだよ、そうですか、そうだね、その通りさ。惨めに惨たらしく足掻いてやるよ、それが私にできる精一杯で、だからこそ楽しませてやるよ。だから場所を移すぞ」

「フッ……そう言えばお前のおもちゃに盾が有ったよな?」

　なんで唐突に?　そう思うと同時に長年養った勘が、戦い抜いた体が脳とは別に右手で顔を覆うように盾を構える。瞬間爆ぜた。

溜めていた魔法ではなく別の魔法が目前で起爆した。軌道も何も見えなかったからあれはそういうものだろう。そのくせに威力はかなりある。防ぎきった筈なのに手は痺れ、私はネギくん達を追い抜き木を薙ぎ倒しながらもんどり打った。視界は赤く染まり、意識も遠くなる。しかし体は治療魔法を使っていた。喉奥から込み上げるものをなんとか飲み込む。ジリ貧ってレベルじゃない。

「おやおや、口での戦いは立派だが実技はそうでもないんだな?」

「ぐっ、く…新しいおもちゃではしゃぐこどもほど厄介なものはないね。だけど、そうだね…くぅ、人を傷つけるやんちゃは叱られても文句言えないよなぁ?」

ご丁寧に飛んでいる身で私が倒れている場所まで降りてきたことに感謝するよ。こっちだって無抵抗で吹き飛ばされた訳ではない。やれたことなんて限られているけども。

左手から火薬をエヴァの周囲に投げ散らし、盾の裏で構えていた魔力を解き放つ。私の手から地面を走り地面から火柱を上げる。先に投げた火薬と反応して爆発するが、当たってはいない。音からして魔力壁で防がれている。だがこれは大掛かりな煙幕だ。見た目は派手だが雑魚も狩れない火力だ。だがこれでいい。

現状、爆炎と土埃でどうあがいても周りは見えない。とはいえこの距離で指輪の位置を間違えることはない。あれは指に嵌めないと効果が薄い。腕の位置なんて簡単に割り出せる。杖で詠唱、壊す勢いで唱えるは火球、メテオの一点集中だ！　どっと疲れが込み上げ立つのも苦労する。スタミナが切れた。でも、やることはひとつだ。カードから竜の心臓を取り出し服のなかに忍ばせる。位置は丁度胸の傷の辺り。

土埃が晴れてエヴァが私の下ろした杖を見て上から来る脅威に頬を引きつかせる。

「おいおいおいおい！　人に境界どうの言えたもんか？」

「先ずは一発。サヨナラ」

「は？　まて、なんだその矢は!?」

「避けれるなんて思うな、死ぬ気で防げよ、私の命の結晶だから――挺身魔槍！」

本来は私兵の命と引き換えに放つ矢だけど、今は私一人。使う命は勿論術者のだ。放つと同時に世界から色が消え体の感覚が消え去る。忍ばせておいた竜の心臓が反応して妙な感覚と共に世界に色が戻る。命が安くて悲しくなるね。慣れたものだけど。

エヴァは避けようと動くが矢が自身に揺れたのを見て防ぐことに切り替えたようだ。直角迄なら即座に動かせるからその判断は間違いではない。

矢はエヴァの盾を粉砕し、メテオが彼女を襲う。目の動きから私の魔法の狙いがわかったようで、舌打ちしてそれを投げた。どこに？　私に。あ、てめ、やりやがったな！

エヴァに向かっていたはずのそれらは綺麗に曲がり、全部が全部私に帰ってきた。復活したてだから盾で防御をするが死ぬ間際の全力全開の魔法だ。諦めよう。

自分の魔法だからと打ち消せるほどこっちの魔法は便利ではない。なんたって死ぬ前に撃った魔法の所有権は死ぬ前の私にある。生き返った私はなにもできない。メテオに競り勝つのはメテオだけなので軌道が同じで後だししても追い付くわけもなく。受けるしかないわけさ。魔力をレジスト出来ても質量は残るし、軌道も変わる。私以外に当たったら不味いからね。大丈夫、死にはしない。少しだけ抵抗してトルネードを起こして威力を減らす努力はするけどあんまり変わらないね。

これから起こることに覚悟を決めた瞬間、爆ぜた。血煙なんて久々に見たなぁ。

大凡、人から出してはいけない音を響かせて、メテオの落下で出来たクレーターの中を這いずる。持っていた盾は腕ごとベコベコで使い物にはならない。一矢報いることも噛みつけも出来なくて泣きそう。泣くために鳴らす喉と目、焼け落ちてるけどね。

狙いをつけるのに腕が鈍っていないのが理解できてよかったよ。うん。流石に自前のメテオで死なないけど、しばらく痛くて動けない。無傷に近い利き腕でヒーリング

オーラは起動してるけど動けない。死ぬのに慣れすぎて思考がはっきりして辛さだけが残る。いやー参った参った。

「……おい、大丈夫か？」

先程も述べたが喉は焼ききれている。声なんて出せないぞ。睨み付ける目すら開けるのが辛い。肉の焦げた臭いが酷いだろうに、顔に出さないのは馴れてるからかね。

「自分の魔法くらい消せるはずだろ？　なんでしなかった？　お前ならそれくらいできただろう」

しないんじゃない、出来ないんだ。いくら魔力をレジストしても落石の結果は覆せない。魔力がなくなっても落ちる岩だぞあれ。

ゲホ。おっと、噎せれた、回復してきたか。でも腕の感覚はないし足に力は入らない。もうしばらくかかりそう。

「なんだ、悔しくて声も出せないのか？」

「の〝ど、がい〝ぶぐぢ、ゅう〝」
「おう、そうか。もう停電も終わる。私の力も戻る。まぁ、なんだ、楽しかったよ。短かったけどな。盾が壊されたのなんて久々で焦った」
「ぞう〝」
「一思いにとどめ指した方が治ったりするのか？」
「ゲホっ、けっそんは、すぐになおら、ない、じかんがかかる」
「そうか。回復した坊主がこっちに来ないようにしとくぞ。だから、まぁ、チャチャゼロが待ってるだろうから回復したらうちにこい。楽しませてもらったお礼に、ここの後処理は済ましておくさ、なぁ、姉さん？」
「ありが、とう」

痛みを感じられる程度には治ったが体は動かない。あの世界でもここまでやった覚えはない。出し尽くして足掻いたけど、遠く及ばなかった。悔しくないといえば嘘になる。けど、憂さ晴らしはした。返り討ちになったのは目を逸らす。逸らす目、回復中だけど。

土の触感が冷たくて気持ちいい。火傷して火照った体に効く。最初から全力でやれば少しは変わったかな……。魔力探知、できるようになってればなぁ……指輪探知でい

いやと思ってた私をぶん殴りたいよ。反省点だらけの結果、やっぱりとても悔しい。千雨に慰めて貰おうかな。負けたこといっぱいあるけど、そのどれよりもとてもとても、悔しい。